室内三度

信なゃんの昔話 第七部 霜とお代

表紙説明 霜と移民

室内三度

外は霜だぞ

コーヒー園

む冷え方で ておれない。 霜の降る夜はしんしんと冷える。肩のスキ間から入り込 『これでは霜だ』 と判ると、じい っとしてね

りながら、 れに心配しているのであった。 起き出して土間に石油の空かんを火鉢替りにして暖を取 無口勝に被害の程度、 今後 の対策など、 それぞ

積年の希望 潰えし

霜の朝

序 ― 初めて読まれる方に

牛 窪 裏

熱の現われである。 る。これは移民開拓史を消してはならないという著者の情 てから約四年・凡そ七ヵ月に一冊平均のスピード出版であ 信ちゃんの昔話第七部「霜と移民」が 治出た。 第一部が出

紹介してきたもので、実にわかり易く著わしてあるので、 私はこれまで出版毎に表紙と挿絵漫画と序文をかいてき それは、出版の都度、初めて、 読まれる読者のために

開拓事情が手に取るようにわかる。

面白い開拓裏話だからです。 お奨めする次第で

出 まで体を持たしたいと思うのだが に揺られながら白夜のような視界の中で、死の音を聞いて 頭からのめりそうになるのを必死になって堪えた。 るようにうずくまった。メマイは依然として続いている。 れた。視界が真白になり倒れかかった。危うく道端に崩れ いた。著者は第十部まで発刊したいと言っている。その日 かけた、坂道にかか ったろうか妻は通りかか この序文を投函のため家内と共に50 った時、強烈なメマイの発作に襲わ ったタクシーを拾った。私は車 0 m先の郵便局 十分も

序

パラナ日伯文化連合会 巧

て、書き続け直接に経験をした事のない三世四世の皆さん 記念すべき二千年の新春を迎える頃には、 目の前にカフエーの実の赤く稔った風景とか、 している沼田信一氏が御高齢にもかかわらず、移住以 六十数年前の記憶を明確にかつ、 正確に思ひ起こし 私の常日頃、 霜の降

刊の 持を思い浮かべる事が出来るような文章の書き方で、第七 りた朝の家族中の悔しさで、食事も「ノド」が通らない気 下さる事に心より敬意を表する者であります。 「霜とカフエー」と題して、日系社会におくりだして

業者の苦痛を書き続けて、その反面、霜のおかげで、 持ちになり、豊かに、楽しい人生を送ったひとの嬉しいお ものともせずに豊かな実話霜とゆう無情な天災を受けた農 ることでも、なかなか、文章にするむずかしさを沼田氏 移住者の多くが、それぞれに体験し、かつ身に覚え しも、又楽しみにしています。

て、身近な移民の歴史を書き続けていただきたいとお願い 公職についておられますが、どうぞ ご健康にお気をつけ 沼田氏はパラナ日伯文化連合会教育委員長並びに多く

序 霜と移民の発刊を祝して パラナ日伯文化連合会 名誉会長 福

登

民、 土と移民、第六部ビッショと移民と続々と発刊されて来ま したが更に此の度第七部のジェアーダと移民を発刊される 沼田氏の昔話第一部カフエと移民、 第三部毒蛇と移民、 第四部ムダンサと移民、第五部赤 第二部ピンガと移

来な をのみながら苦労をいやしていたのがつ ら日暮まで働きこんな話しではなかったと苦労されピンガ 配耕されカ と聞き第 した人がたくさんおられます。 いカフ 部 フ エとジェアダであります。移民はファゼン ェ園に二ケ年義務労働で働く時間は日の出か のカフエと移民と移民にとって忘れる事 **,** \ のみすぎで早死 ダに \mathcal{O}

ラナの黄金時代を築いた人がたくさんおられますが のできはジェ 義務労働を終りパラナ州に移転されカフ ります。 アダであって移民と切りはなせない エを植へられ カフ 工 工

植 す。沼田氏が此度七部をジェアダと移民として発刊され と聞き期待するものであります。 う。ここ数年霜が来ないので新植の少面積で大分カフ たえあのカフエを根こそぎにして大豆小麦ミーリ 大霜それは一九七五年とパラナカフェ栽培者に大打撃あ 過去をふりかへってみますと一九 へる人がふえて居ますが往時を思えば誠に僅かなも 四二年大霜一九 ョに変ぼ 五. エを 五. \mathcal{O} る

処次はないかと云われ三部、 変喜ばれてお 日本の ロータリ倶の友人に二部のビンガと移民を送っ ります。 四部、 五部、 六部を送って大

員会の長として活躍されておられます沼田氏 ラナ文化連合会の相談役並に教育委員長その他あらゆる委 と移民 田氏は高齢にてモラロジの事でよく旅行されその上 の発刊をお祝 い申し上げます。 の健康を祈り

面白い モジ市イピランガ病院院長 ブラジル・ モラ ロジー協会埋事長 信ちゃんの昔話

森昇

沼田君の昔話も、近く七冊目が刊行されるという事で 私に序文をと言われて驚いている。

地の者さえ気に付いていない事件を三十余編まとめて一冊 中に創立した私達の教育センターの建設中の思い出を、 創立三十五周年を迎えて、の祝典に、モジ市郊外の シリーズ、第七部を印刷に廻すといわれて驚いている次第 の本として編纂してくれたばかりの此の頃矢つぎ早に移民 それは去る六月に六冊目を出し、その後、私達の協会

致します。 という第七部、皆さんにも一読下さいますよう、 長年の苦労を一夜に失った霜の体けんが主になっている おすすめ

に、 尚氏は私達の協会の長い間の副埋事長であり、 八十才を越えた老齢観を見せない所は見習いたい。 ナ・日本語モデル校の責任者でもあり、 仲々忙しい上 ロン

序 序 表紙説 序 初 面 白 \otimes 霜と移民 明 1 て読まれる方に… 珍らし の発刊を祝 い信ちゃ の昔話 森 福島 嶋 牛 窪 田 正 昇 登 巧 襄

第三話 第二話 第 話 霜に驚 霜 霜 に \mathcal{O} . も 種 朝 類 13 9

第五話 第四話 4 かん の経験 Щ \mathcal{O}

第六 話 霜害 <u>つ</u> \bigcirc 打撃

26

2 2

1

9

1 7

第七話 霜害を喜ん だ

九話 詰 朴さん 霜 \mathcal{O} 朝 \mathcal{O} \mathcal{O} 訪 伯 9 \mathcal{O} 思

1 出

3

7

3

4

3

0

4

0

第

第

話 思 1 よう

第

十三話 十二話 馬鹿げ 口 ツ 力 た考え… の発生

第

第

第

極楽

十四話 五話 水害: 三本足は危

第

第

5 5 5 8 1

4 7 3

6

著者略歴	第第第第第第第第第第第第第第第三二十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十	
	時期はずれ ボリヤーノ空港… 布団 (ふとん) 本団 (ふとん) 方部 一正造 とが とが、の受難 にゲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	オリノニヤ
1 1 5	1 1 1 1 1 0 0 0 9 9 9 8 8 8 7 7 7 6 6 1 8 5 2 9 6 2 9 6 2 8 5 2 9 5	

第一話

霜の朝

れる良 うと思う。 唯良く働らいたという事だけでは成功は出来兼ねただろ ぶらじる移民も成功者の中に入るには何回か幸運に恵ま い運命を持っていないと難かしかったと思われる。

ら、 射止めた事になるが、 まずまず二十年は無肥料で作物の出来た地帯に理想のコー ヒー園を持てた人は、そうでない人に比べて大きな幸運を ロッシャ地帯といわれる、 今数拾年前を振り返って見ると少なくとも一九四 っていた。 や、一九七〇年頃迄にパラナ州のいわゆるテーラ その幸運の中にも一人、一人差を 砂の無い上に良く肥えていて、 〇年か

枝でクジを作っ 同じに見えた土地に大きな差があったのである。 に差が無 が開けた印を頼りにしてグルリと外側を廻って見ると土地 緒に暮すのに並んで土地を買う事になった。 例を取ると、昭和九年六月三人の北海道からの同船者が 流 地 れの上の方から順にA・B・C・と決めて、木の小 いので、どうでも良いがクジを作ってA・B・C・ い方に流れている小川が境になっているので、 ったが、お互い希望にもえて開拓して見ると て各自の土地を決めた。その時は誰にも何 測量技師

の土地を斜めに低目が横切ってBの土地を中間から上

の角迄登っていたのである。

波状形 度が下がる みのところが案外暖かく、低い川の方に下がるに従って温 ブラジルでもサンパウロ州やパラナ州の様なゆるやか の地帯では、エスピゴンと言われる分水嶺となる高 \mathcal{O} である。

霜の害なども少ないのである。 従ってカフ 工 ーを植えても分水嶺に近い所が良く育ち、

いる所などがさきに被害を受けるのであった。 軽 い霜 の場合では低い所、又、高 い部分でも少し窪んで

大差が出来たのである。 の害を受けAは殆んど損害なしという事になったので全く 従って一寸した霜でもCは半分程、Bはその半分程

言へないが、 ら冷えて低い処はその割に温かかったのではないかと思う であるが、私には日本の農家の経験が無 ここで一寸書き足して置きたい事は、日本では高 当地では低い所から冷へるのであった。 1 のでは 0 処 カ

準備にかかった。 それで運の良い A氏は間も無く土地を売って日本帰 り

渡伯八年余りの 珍しい成功者であ った。

の持って帰りたいと願っていたお金の額である。 一寸ここで書き足しておきたい事は、その当時 の成功者

る。 金利で食べられるので、元気な者が働らく分は残って行く その額は、大概帰る旅費の外に二万円位であった様 当時の金で二万円持って帰ると、十人家族位では銀行

という時代 しを度々きいたものである。 であ ったようである。私はそうした父たちの

円札等数少なく、市場には殆んど十円札が高額紙幣として 巾を利かしていたものである。 戦後 の円と違って、戦前の円は大変に価値が有 0 た。 百

円の現金を握るという。植民地で初めての故郷へ錦を飾っ て引あげられる条件となった。それは訪日ではなく、 その時代渡伯八年にして昭和十六年末にAは、二万数 った。 帰国

ある。 三人で入植地をクジ引きした時の幸運がもたらした \mathcal{O}

終ると考えてのA氏の行動であったが、戦争が長引き、そ その時を頂点に長い間苦労するのであった。 の上敗戦となったので、財産を整埋して金を握ったA氏は この話、結果は戦争が、 日清、 日露の戦争の様に短期に

ると、解る事は人の幸運というものは仲々長く続かな の様である。 この様に世の中と言うものは三十年、五十年と過ぎてみ

せられた事は二度、三度とあった。 り返って見れば、今度は我が家に廻ってくれるかと、 る。私の処は通り過ぎてばかりいる様であるけれども、振 たとえに言われる様に『金は天下の 廻り持ち』 の様 思わ

襲ってくる一夜の霜で無残に打ちひしがれた事が何 比の蕾が咲いたら、 今度こそは、 と思わせては、 回か

有ったのである。

『冷えて来たぞ、これでは霜になるか』

き出して来て、台処の土間に空かんを持って来て火をたい て温まりながら、 と、心配になってゆっくり眠ても居れず、ごそごそと起

「おい!寒暖計は何度になっているか」

と聞くと

「三度になったよ。」

「そうかあ」

ザール (コーヒー園) ゆは氷となっている。 ……『それでは霜だなあ』外套を着て月明かりのカフ 迄来て見ると、カフェーの葉のつ

「やられたな、畠中全滅かなあ」

「まあ、やられても仕方がないさ」

「やられるのはうちだけではないのだ。」

「また育てなおすさ。」

して昔話を書き出してみよう。 こんな思をした事を思い返して今回は『霜と移民』と題

川伽

屋内三度今朝は霜だぞコーヒー園

瞬間である。 いやでも再生へ、乗り切る覚悟を決めなければならない

第二話

言つ う話を聞 回霜と移民と題して私の想い出集の第七部を出そうとして 寸とまどっている。 ている には いた事があったが、黒霜とはどうゆう状態の 「あ のか、念を押して聞いておかなかったので、今 \mathcal{O} 年は黒霜にやられたも のな:: 事を

害を何 てコ できたのに、 いる霜 霜と移民との表題で書く霜は、我々が常夏 回 ヒー園を始め、 「か受け の事を指 日本では晩秋にやっと来る筈の、 て驚いたり、中には破産の憂き目をみた人 しているのである。 果樹や野菜に相当な、或は全滅 \mathcal{O} 国と 霜に降られ \mathcal{O} 宣伝 の被

いう事も ている水道管の ラジ った洗面器 て起き出 何回かあ ルとはその様に、時には相当に冷えて戸 中の してみるとポタポタと水滴が落ちて の水が底まで氷っていたり、表の地上に ったし、これからもある筈である。 水が氷って膨張したために、鉄管が に 1 た 出 割 H

毎年 地方も ラジ に雪 ルは広大な国 る。 の降るところもあり、又絶体に霜の降らな であるから、 海岸山脈の高い処 は

あ 工 0 パラナ州 を続 では地 ば儲けられる可能性が有るので、 けている人も居る。 力が良い \mathcal{O} で 霜 \mathcal{O} 降りない 年が 今でもカ 何 年 カン

とである。 最近は値段が良いので栽培者が少し増加しているとのこ

北 は移動している 然し全体的 へ戻っている に霜を恐れて、暖い北へ北へとカフェー のである。 のが実状である。 北から渡って来て、 再 地 び

ある。 一夜にして与えるあの霜の被害はやはり大きか った \mathcal{O} で

思われる事を思い出すのである。 九六五年前後に一 そこで、比の文の初めに書いた黒霜であるが、 つの耕地で、あれが黒霜でなか 私は、 ったかと

らな 吹いていた、畠に仕事に出ていたが何とも寒くて仕事にな その日、太陽は出ていたが、かなり寒い風が午前中から

明日 る。 は霜になるのか、ならないのかと心配していたのであ の降る時は寒くても大抵は風 の無い のが普通なので、

が黒く変色して来たのである。 ところが午後の三時頃からか、ボ ツボッとコ ヒー \mathcal{O} 葉

に焼けて大変な被害にあった事がある。 翌朝になると案の定降霜あり、 昨日黒くなった上に、 更

の状態が黒霜という状態であったのかも知れな

霜では次の様な事もあった。

夕方から冷えて来てこれでは霜になるかも知れないと心配

ら寒さが入ってくるのでかなり冷えている事がわかる しながら寝ていると、ふだんの寒さと違って肩のところか ゆっくり眠れるものではない。

も起き出してくる。 ながら心配しても仕方のない、 それで末明に起きて台所に火をもやして、温もりを取 心配をするのである。 弟ら n

かけて見る。 その内にカフェーザール (コーヒー園) 迄様子を見に 出

る朝月である。 霜の降る朝はそ の殆んどが月があ 0 た様である。

それも寒さの為に寒そうにしている月であ った。

どうしようもない相当な被害を受けると覚悟を決めざるを 得ない。 ると、それが氷っているので、その氷の工合で、これでは コーヒーの木には露がおりているのであるが、さわ 更に又、霜は殆んどが多少に構らず雨の後に来るので ってみ

ボタとしずくになって落ちてゆく、 で、 やがて夜明となると、霜の朝はカラリと晴れる事が殆ど 黒く変色していくのであった。 明るい太陽が昇ってくると、葉の氷が解けて、 その後が見ている内 ボタ・

あった。 また霜の朝に霧がかかってくれて被害が軽くすんだ事も

ら昇る霧の為に、標高が低くしてカフェーの育つ所がある という事を聞いたが、私たちは大河の近い所に植えた事は それで大きい河の近い所で、或はダムが出来て、そこか

あ ったが、 霧の恩恵にはめぐまれなかった。

に出て見ると、カフェーの葉は氷ってい 然し珍しい事はあった。それはいつもの霜の朝の様に 白い氷りが粉の様にたまるので有る。 て、 爪でこする 温

有った。 が黒く焼けていかず、少し黄色味はしたが助かった事が タと大変なしずくは落ちていたが、いつものように葉の色 入り、陽が出てから畠に出て見ると、 『これでは又やられたな』 と覚悟させられて、 氷は解けてボタ、 再 び床 ボ

ヒー 変である。そこに年老いた親がいると尚更の事である。 二、三年かけて手入れしなければならないのであるから ともあれ、 園が一夜にして枯らされた上に、根本から出る芽を あれ程見事な、青々とした見渡す限 ŋ \mathcal{O} コ

の中 なったが、 なったが青いコーヒーの木が出て来て見ばえの良い事に 姿を思い出す。一ヵ月程すると、かなり広い間、小さくは らか毎日一メートル程の棒で枯れ葉をたたき落としていた の方に半分程青く残っていたので霜の後十日程 の隣の婆ちゃんが、立派なカフェーが枯れたけれど木 一と月程した頃次の霜が来て、それも枯れてし

ろう、又この収穫が取れれば、或いは懐かしい日本に帰え れるかも知れない望みも持っていたのであろう 出すが霜の事では淋しい事が多い。 腰 今回霜 の曲った婆ちゃんが、若い者に幾らかでも手伝 の事について書こうとすると、忘れていた事を思 つ 7

第三記覧く

を助けたい、 きな原因ではあった様ではあるが、それと共に体の弱い私 我が家の渡伯については、昭和初期の日本の不景気が大 という強い親の愛情も有った事は間違い

と診断したのであるから、両親には心配をかけたわけであ たのであるが、全部の医師が、兵隊検査迄の寿命は難しい たが、生まれた時から胃腸が弱く、とても比の子は育たな いと何人もの医者に診断され続けであったとの事である。 私が記憶する様になってからも数人の医師の診察を受け 当時の私は、何も床についているという病人ではなか 0

だちと、特別に変った事はなく尋常高等小学校八ヶ年中、 憶にないが、この二回だけで後は休んだ事はないのである 三日間は、兄の死亡の時、 われないのであった。 から、私にすれば、どうして近い内に死ぬのか本当には思 それでは自分はどうであったかというと、別に近所の友 次の五日間は何で休んだのか記

食べ終わらないうちに、 うと起こされて、顔を洗って、 であった。 特別な症状としては朝ねぼうをしていて学校に遅れるぞ 「きゅうつ…」と、 急いでごはんを食べると、 腹痛が来るの

あった。そのほかにはあごの下にグリグリとしたかたまり のもやしを乾燥して粉末にしたという薬を一服飲むとすぐ その時の為に某家の家伝薬と言って、 比の方はなんの痛みもなかった。 ので、それを飲んで三百メートル程の学校へ走るので 山出来ていた。 これが致命傷だろうと言う人がいた 神社 の松 の薬と麦

の国 だが、どの医者も兵隊検査までは育たないと診断 への移住を思い立ったというのが正しいのかも ったから、私を助ける為に年中暖かい いわゆる常夏 知れ する

を募集していた。『満蒙開拓百万家族募集』というビラが 方々の電柱等に張られていた。 当 時 州を独立させた軍部が、満州や蒙古 <u>~</u> の移住者

処はだめだと言ってブラジルを選んだのであった。 両親は北海道の寒さで私が育たないのであるから更に寒

陸し八月上旬には早くもジャングルの開拓が始まった。 ブラジルの暦の上では冬の七月二十九目にサントスに上

真冬でもこんなに暖かで有難いと五町歩程の伐採に取 十日程 した頃であった。 り

枯れ草の上や、倒れ木の上に白く霜が氷っているのであ をしなければと毛糸のジャケッを着て仕事に出かけると、 が何とも寒くなって来た。少々寒くとも降らなければ仕事 始めての雨が降った。雨が止って仕事にかかろうとした

「なんだー。常夏の国と言うのに霜が降るとはー

と、驚いたのは着伯一週間程した時であった。

いた古木氏が通りかかったので 次の朝も霜であった。此の時ジャングル伐採を請負って

『ブラジルにも霜が降るのですね、もっと暖い国かと思

て居ましたがーー』

と、話して見ると、

『これ位で冬が終るのですから有難い処ですよ。』

との返事であった。

『そうか、これが真冬か、半年雪におおわれる北海道

事を思えば有難い事だーー』

るのであった。 と、希望を持直して、ジャングル五町歩の開拓に斧を振

霜はこの二朝で初年度の冬は終ったのであった。

第四 話

る。 育って来ても何時の日か帰国する事を考えてはいたのであ 出稼ぎに来たブラジルであったから、 結婚し、子供が

は、 然し戦争が始まり、それが長引き、やがて敗戦となって 当分帰国しても仕方がないから、落ち着いて様子を見

ようという気持ちになていた。

ば誠にコツケイな話に引きずられて行く人達も相当数い 占領した南洋方面の開拓に行く事になるのだ等と、今思へ なって、まじめに働きもしないで日本からの迎へを待って 世間では戦勝組が出て来て、おかしなニュースに夢中に

が夢中になってしまった。 私たちと一緒に渡伯した仲間にも三家族の中の二家族迄

落ち着いた仕事が出来た。 との交際が続 私たちは父が亡くなってからも、父と親交の有った いたので、戦後も勝組に迷わされる事もなく N 氏

ない。従って落ち着いて働くには、経済に余裕が出来れば 仕事を拡張して行かうという事になった。 戦争が敗戦に終ったので当分はとても帰国など考えられ

通学させる事にした。 その内に子供達が成長して来たので、ブラジルの学校へ

る。 体操や唱歌の授業はなく、更に運動会も遠足もないのであ 子供を学校に出して気がついた事は、 此方の学校では、

を植えて、その近くに運動場を造成して、遠足と運動会が 出来る様にしよう。みかんは食べ放題という事にしたら、 で、或る年、 その事が気にかかって何年かしてから、ファゼンダに、 ェーにむかない少し低い場所で、良い処があったの 弟と相談してそこへ一千五百株のミカンの苗

町 づつ植付けたの 苗を色々混ぜて三千株取り寄せて、二つの耕地に千五百本 園を真っ黒に枯らす大霜がきた。 の子供たちは喜ぶであろうと考えて、 ところが植えつけて一と月とたたぬ内に、緑のコーヒー 二つのみかん山が出来る予定である。 或る年、みかんの

回復 収入の大元であるカフ の為に向けなければならない事になった。 ェーがいたんだ以上、主力をそ \mathcal{O}

と思う程枯らしてしまった。 あろうと思ったが、それをする手間が出来ずに、半分以上 う少し根元に土を寄せてやれば枯らす割合は少なくなるで 従って植えたばかりのみかんの苗木もこの寒さでは、

も、台木からの芽を取る手人れをしないものだから、勢い のであった。 の良いブルット また芽が出ても台木からの物が多く、 (徒長枝) に負けて良い木になり兼ねた 又助かった物

まった。 子供らにみかん山で自由に遊ばせる計画は画餅に帰してし 従って、張り切って取り掛かった、社会奉仕?的、 町 \mathcal{O}

ば、それから後、 がかかる事になるので、 る仕事ではない。という神様のお恵みであったのかも知れ ヶ年早く来た霜に少なからぬ恨みを持ったものである。 そこでどこにも無いものを造成しようと考えた事で、 いと考えている次第である。 然し後日落ちついて考えてみれば、これが完成していれ 無収入の処に毎年々々、それ相当な経費 お前たちの様な小資本の者のす

第五話

一つの経験

も大変なカフェー景気をもたらした。 九四九年に倍値に値上がりしたカフ エー

海にも捨てたという事であった。 け迄、契約者の住宅の建てる資金も、低利の上長期に融資 ウロ州で植付け禁止令を発した上、相当の数量を焼いた してくれた。一九二〇年代後半に暴落した時から、サン 政府も増産を奨励して土地の有る者には開拓から、

す。 値上がりが来てあわてたのであろう。 向かう途中でも相当に火をつけて焼いていた事を思い出 一九三四年六月初旬私たちがサンパウロ市からパラナに 新しく植えず有る木は老齢化して減産していた処へ、

増産する事になった。 けて様子を見ていたが仲々下がって来ないので、私たちも ところが暴騰した値は暴落する恐れがあろうと注意を受

プラーという地区に六〇アルケールを二回に分けて切り拓 いてカフェーを植付けた。 マリンガ市から数十キロ遠方のイバイ河 . の 向 い側

念 フェー向きに思えたのである。(一アルケール=二町四反 海抜は低いがパルミットヤシの密生している処でカ 先ずパルミットをかん詰工場に売りペローバその他

た。 たのであった。当時の日本人としては少ない方では で、私達兄弟が出かけて、 分達が人夫を使ってしたのである。有に六方株を超えてい の用材は木工場に売り、その後に伐採して焼き払 カフェーを植える為 の測量は った 自

契約者の住宅は大工職人に請負わせた。

畠 の支配は隣 り の 地主に依頼して順調な出だしであ 0

穫となった。然しこの初め ならなかった。 事にして、その翌年から契約者が収穫して、その半分を頂 く事になっていたので、この四年目の収穫は私 カフェ ーの木はスクスクと成長して四年目には の収穫は育てた契約者にあげる の収入には 相当な

で喜んでいた。 コーヒーの実は赤く熟して美しく契約者達も晴々とした顔 この四年日の収穫の始まる頃耕地へ行くと誠に見事に

枚の青葉も残さずに枯れてしまったのである。 て、私の力では広い六万株余の希望の ところがそれから間もなく何年振りかの寒波が襲 コーヒー 園は 地上一 つて来

打撃である カフエー 栽培者として霜害の事は覚悟していてもや V)

に過ぎて行った。 の度々軽いが蕾をいためていく霜が来て結局九ヶ年とい それでも辛抱して待っていると、それから五年とい のふところに入るカフ エー代というもの の無 う ć

俵にも近い収穫が有るかも知れないと思われる程に立派な そして九年目には、今年さえ霜が無ければ、 ヒー園に復活したのである。 今度は一万

た。 或る日二人連れ \mathcal{O} 伯人の来客が町の私 の家に 現れ

んでいる人で、私のジャプラーのコーヒー園を買いたい いう事である。 応接間に入ってもらって来意を尋ねると、 マりン ガに 住

返事をする事にして、 りは来年の十月末日に払う条件でどうかとの事であった。 くれますか』と、尋ねると、総額は幾らで内金は半金、残 此方では売る事は考えていなかっ 私は考えていなかった事と、弟の意見もある事で、 一応帰ったもらった。 たので 『幾ら払 って

算を一 比 の人のつけた値段は今年の蕾の予想から来年取れ 万俵と見た時の売り上げ金位の価格であった。 る予

で土地は丸儲けという事である。 従って此の二、三ケ月の間に降霜が無ければ来年の一作

に 然し若し寒さが来れば、何時元が取れるかわからな る。 1

穫を約束するかの様に花芽がふくらんで来ているが、欲を 出さずに手離なしておくべきと決心して間も無くマリン へ出かけて半金を頂いて、 弟と相談 の結果、今は目前に立派に回復して、 此の土地を手離した。 来年の ガ 収

拾年目にしてやっと私の為に花芽が沢山ふくらみかけて

たのである 来てくれてい る \mathcal{O} かと思うと手離す決心は容易では な か 0

他の が降 で安心したのであ 地権譲渡 方面に収入が有るので心配はしない様にと言われた りた場合にも来年の支払は出来ますかと念を押すと、 の書類にサインをする時に、私が例えば近く った。

あっ をさせた此 然し地権譲渡をして間も無く寒波が来て、一万俵 た。 0 コ ヒー 園は再び地上から姿を消したので の予想

の汗 パラナ州 の結晶を失うという苦難があった。 のカフエー栽培者にはこの様に一夜にして長年

も起き上がるという強い根性が育っていた様でもある。 し亦その為カフェー栽培者には、やられてもやられ 7

利と考えられたのである。 する技術が進んだ上、機械化出来る平坦な暖かい地帯が有 た北の暖 然し一九八 が方 〇年頃からか、カフェー と移動して行くのであった。ヤセ地は改良 の栽培は次第に元来

械で た。 私は土地を少し広く持っていたので、カフ 出来る 仕事へと変更してパラナに落ち着いてしま エ ーをやめて機

す。 めの ブラジルで、 振返 ンドリ ってみれば移民で転々と引越しに苦労した人 初めの引越しが亡父の考 ナへ来ていた幸せを有難く思っている へで、全くの 拓き初 \mathcal{O}

| 霜害の打撃|

時は、先ずパラナ州が一番大きくその被害を受けているの であった。 ブラジルで霜が降っ てコーヒー園に被害が有ったという

たからである。 それは此処がコーヒー栽培の限界線という地点迄来て

間でセレアエスが収穫出来たので再生経費の心配はそれ程 上に、 出していたかという事であるが、霜は毎年降るものではな では無かったのである。 の心配はなく、又、霜害が有っても、再び枯れた株と株の レアエス)の生産が有ったので、 いたので他の地方と違って殆ど無肥料で多収穫を得られた それでは何故その様な処がコーヒー生産地として人気を 霜と霜の間で相当に収穫が出来た上に、土地が肥えて 育成中などそのコーヒーの株と株の間で雑穀 四ケ年の育成期の生活費

穫はあるかと美事に花芽を出して来た緑の の収穫をしたら、先ず両親を訪日させてやろう。 それは、人に依って差は有るけれども来年は○○俵の収 コ ヒ

の収穫をしたら、 畠の拡張をしよう。

拡張も出来よう。 この収穫をしたら、 住宅を新築し新車を買い、 更に畠 \mathcal{O}

の収穫をしたら・ と色々な夢に希望をふくらませ

うが南 てい い為に防ぎ様が無く大被害を受けるのであった。 る時に、アンデス山脈から寒波が降りてくるの の方から寒さが北上して来て降霜となれば、 だとい

け中の木を積んで燃やしてみたが何の効果もなかった。 の時、 畠中で、 コーヒーとコーヒー の間で畠

という事であ 半分真赤に燃えているマキの残りの方に霜が氷ってい った。 . る

事になり、 の考えか、 或る年、 それは戦争が終った数年後の事であっ 霜の朝に、 機械を取りよせて煙幕を張った事があった。 戦争の時の様に煙幕を張ろうと言う た。

が全然見えなくなるので、或いは少し効果が出るかと思わ てゆくのである。この煙の中に入ると一メートル先きの 透き通る様な油を機械を通じて焼くと無臭の白い煙が 何の効果も出なかったようである。

暖かい地方に移る事になった。 様は見つからず、国の広いブラジルでは産地を北上させて らかの効果は有ったであろうが、この煙りにも重さが有る それは、 結局大面積 っていない川辺りに流れていってしまうからであった。 高いコーヒー園に残っていないで低い、コーヒー その煙がコーヒー園を覆っていてくれれば、 コーヒー園では未だに人為的に霜害の防ぎ

た事が更に拍車をかける事になったのである。 の進歩でヤセ地の土壌改良が 出来る様にな 0

これでさしものコーヒーの一大生産地を誇ったパラナ州

も 五 になった。 ○年に亘ったこの コーヒー黄金時代に別れを告げる事

る。 今日では当時の一 割の生産にも満たないのではと思われ

案外面白い事になっているらしいのである。 いる人も居る。 それでも昔の夢を迫って末だにコーヒー生産を頑張 聞くところによると近頃は値が良いので 0

ある。 終りに霜害の様子に付いて少しつけ加 へて置きた い事が

な破産者が殆んどなかった事であろう。 思えばあ の一夜にして大損害を与へた霜にも構らず悲惨

は理由があった。 第三者が聞く時には不審に思われる筈であるが、それ

立てる予猶があるのであった。 出てくるので、その年は、それなりの収穫があって対策を \mathcal{O} ので、被害は翌年からの生産に一年或いは二ケ年に及んで 部に被害を与へる事もあるが、殆んど収穫が出来るも 番は霜の降る季節はコーヒーの 収穫期でその \mathcal{O} 収

尚、 面白い思いをする事さへあったものである。 その霜害の為にその年の収穫が値上りする が

穫になるので生活上には余り変りは無かったのである。 間作で、綿、 小さく家族の手で経営する時代なら、前に述べた様に、 稱、 キビ、豆等を植えると、これが相当な収

従って霜は暴大な損害は与えたが、儲け損ねたと言う事

いう年賦で大きく投資した処へ霜に見舞われるとさあどう こようという事になる事はあった。 それが、欲との二人連れで、三年払いだ、四年払いだと 事業 の破綻につながるものではなか ったのであ

翌年払いであった。そして翌年残金を払って、更にその隣 たものは、早百%値上がりしていたのであった。 りのジャングルを二百アルケール買ったのであるが、これ で、半金入れてかったのであった。従って前年度に購入し は既に値上がりしていて一アルケール八千クルゼーロス ケール四千クルゼイロスで半金の入れ金で買った。残金は (一アルケール、二町四反余) のジャングルを一アル の実例をあげると、私が五十一年に二百アルケー

ならば、更に大きな利益になるのであった。 若しその上地を開拓してコー -ヒーの植付けをして置く

地に借金が有ると政府の開拓低利資金が借りられないの るから難しい。 あるが、自分に運があるのか、無いのかが解らない で、借金を相手の信用する保証人の署名をした借用証書を いると、思わぬ霜の為につまずく事がおきるのである。土 く人もいたが、それで運の良い人には何事もなくいくので れて、地権 然しその時、地代の年賦を残して置いて、開拓などして (エスクリツーラ) をもらって什事をしてい

の知り合いに、そうした方法で大農地を購入して始 つまづいたので、入れた借用証書分だけ土地を返そ

た。 あの証書は私は次の仕事に使って既に私の所には無いの うと思 どうにもならん」と、と言われて大変苦労した人がい って交渉に行くと 「あなた達の信用が良い 0)

いたかと、 同じ様な仕事をしていた私 尋ねに来られていた。 の所へ ` 沼田さんはどうして

あった。 て置いてあったので問題はなかった事をお話しした事で 私はすぐに開拓する予定が無かったので、年賦は借金と

資をして、 しかし私も五 夜をゆっくり眠れない経験を何回かしたので ○年近い コーヒー -景気時代には、 無理な投

第七話

霜害を喜んだ

そ れは事実かどうか判明したわ けではないが、当地に人

の噂として流れて来た話である。

地方に運の良い家族が居た。 口 ンドリーナ市より百余KMのマリンガ市を少し過ぎた

支払 既成コー った地代が戻って来たそうである。 ヒー園を購入して初年度の収穫をすると、殆ど

フェ そんなうまい話がと不信に思う人が大方であろうが、カ の全盛時代にはそうした事を時々聞いたものであ

スに値上がりした。 のまま、 ロスであった物が、収穫の終る九月頃には二百クルゼー 九 四九年の如き、収穫に入る五、六 カフェーの殻付 (コツコ) 一俵の値が百クル 月頃迄は、 前年度 ゼ 口

ろ、唯、 ある。 が、そこから五十KM程離れた、イバイ河近くで立派に育 あった場合等は、 てられていた十アルケール程のコーヒー園を買ったとこ 私の 従って若し、この年の始めに既成コ 知人にもマリアルバの郊外に土地を持っていた人 一年の収穫で地代が払へたと喜んで居られた事が その年の収穫で地代が払えたであろう。 ーヒー園を購

ときていた。 ので収穫も殆んど家族でして仕舞うので経費が 人に二十歳台の若い息子さんが三人程いて、元気良く働 話 は始めに書いた家族に戻るが、此の家族六十才前 かからな の主

を胸勘定して見ると翌年の収穫は相当な額になる。 そこで自分の育てた土地と次に買った土地 \mathcal{O} \mathcal{O}

分の 次に買う土地は豊作する花 更にそれを資本として次 土地は豊作を収穫 出来る事になる。 た後で収穫はそれ程でなくとも、 の咲 既成コーヒー いた処を捜せば、又初年に 園を買うと、

成功街道を進んでいた。 そ の様に考え調子に乗ったその家族は次から次と順調

たのは主婦であったという。 男衆の意気は誠に盛んであったが、一人不安を感じて

き入れない。 んと思って、注意をしても、昔の様な素直さがなく仲々聞 人に対する態度も次第に横柄になっていく、これでは 立派な住宅は建てる。車は新車を何台も並べる。 いか

て来た。 そ の内に、次第に色町に親子揃 って遊びに行く様にな 0

いと一人心配をしていた。 主婦兼母親はこれではいかん、こんな生活で続く筈がな

と、とてつもない大きな既成コーヒー であった。 男達は、見知らぬ男と何か交渉をしていると思って 園を買ったという事 1 る

収穫になると鼻高々である。 息子達の話では今年の収穫は少ないが、来年度は大変な

がない、と一人で心配していた。 子供達がそんな大きな事業をいつ迄も経営していけ 母親は何うなる事であろうか、教育もろくにしていな うる道理

木には早くも大変な花芽が吹き出して来た。 七月に入って収穫に追われていたが、一面 のカフ エ \mathcal{O}

来な 息子達は「こんなに良く芽が出て来たのはも早や寒さの い証拠だ」等と判った様な事を言っていた。

たい風にあおられて昼間の内に葉が黒くなって来た。 いなあ…』外とうを着てカフェーザールに行って見ると冷 ところが、一日急激に冷えて来た『寒い、寒い、あ

言うのだと教えてくれた人が居るが、私は黒霜と言う実態 は余り知らないのである。 人によってはこの状態を黒霜(ジヤーダ・プレット)と

けていてもいなくとも見渡す限りのコーヒー園は真黒に被 害を受けるのであった。 その寒風の有った翌朝は大変な大霜となって、寒風に焼

書いた家のコーヒー園もものの見事にという言葉は当ては まらないが全滅したそうである。 私のコーヒー園も真黒に枯らされたのであるが、先きに

耕地も、白分の持っていたものも全滅したのであるから大 変である。 大耕地を購入して、この作で楽々払うつもりが、買った

金が払えない、カフェザールを売ってと言っても、 コーヒー園ではいくらにも売れない さしもの元気一杯の男衆も、カフエーの収穫なしでは後 霜枯れ

二、三日は 持っていれば、 ろくに食事もせずに寝ていたかも知れない。 手入れ賃がかかる。『シューン』 として

主婦である母親が男衆と反対にこの大霜害を喜んで居られ たという事であった。 唯伝 ってきた噂では、「これで目がさめるであろう」と、

朴(パク)さんの訪伯

から、 早、 拾数年、 某先生が見えられた事がある。 或いは弐拾年になるかも知れない 頃、 韓国

教授を勤められていた。 先生は韓国政府の要人でもあり経済学の大家で、大学の

響を与えているのであるから有難いものだ。 付いて、当を得た説明をなされた時にはさすがに政府の要 職にある様な人は目が利くものかなと驚いた覚えがある。 であるが、早くもその間の新聞からブラジルの経済事情に 此の先生の講演の中の一例が、私の生涯に大きな良い影 サンパウロに二週間程の滞在の後、当地に見えられた

のだ。 し此の立派な先生にも、思わぬところに失敗はあ

ある。 初めてブラジルへ来たのであるからしかたの無い事では

半傾 節が有る事に気がつかず夏物の着替えを二、三枚持って気 軽に来られた それは失敗と言う様な事ではない。唯、 いている為に熱帯にも夏と冬が有って、相当に寒い季 のであった。 地球が二十三度

で失敗した人も多い筈である。 長い間の移民にも、そうした考えから、 冬物を持参しな

使っているもの 具)だけ残して、 う知らせを受けていたので助かったのである。 私達は現在 の妻の家族が一年早く来ていて、 ではストーブ(石炭を燃やして暖をとる道 冬物の着物や蒲団迄皆持参する様にとい 北海道

と、恵まれたブラジルの気候を羨む位の気持ちでいたも 夫妻もサンパウロ滞在中は、冬と云うのにこの暖かさだ に寒波が襲って来た。 さて夏物 ロンドリーナに来られる頃から天気がくずれ出し、 の二、三枚の持参でサンパウロに来た朴先生

『あらどうしたのでしょう、 この寒さ』

さんが、薄い夏物を、二枚位重ねてもとてもこの寒さでは 服と着て何とか凌いでも、大きな八十キロも越える様な奥 耐えられない。 先生はカミーザ (シャツ) を二枚着た上にチョ ッキ洋

れて居た事を思 と、それでも一枚体に合う物が見つ なられた北原茂晴氏が、何軒も何軒も歩いた末に、 肥えた人は、ブラジル人の肥えた人より一廻り大き 早速町へ毛糸のセーターを貫いに出て見たが、 仲々間に合うのが無い。案内して歩いた、今は故人と い出すの である。 かって良かっ たと話さ 国 P 0

言われるブラジルではあるが寒い日はかなりに冷え 毛糸のセー それで朴夫人も何とか助かったの ター を何枚か用意して置かなくては不自由する であるが、全く常夏 る ので

ルを知らない人には予想外なのである。 い期間に亘って何時来るか解らないのであるから、ブラジ その寒い日の来る期間が四月から十一月頃までの大変長

言えば、そうではなく、作物に大被害を与える様な霜は数 怖れて植えない事も出来ないのである。 年或いは拾年も間をおいたりするので、時たま来る霜害を だからと言って、それでは霜に弱い作物は作れない カン

ある。 大変。それが為に破産の浮き目に遭う事も起きてくるので たまたま大きな借金を抱えている様な年に降霜に遭うと

誠にブラジルの霜害はいたずらものである。

第九話 霜の朝の一つの思い出



たのであ でアフリカにも雪が降るのかと驚いたものである。 ン港からケープタウン港にかけて随分寒くなって、ケー 今度行く南米のブラジルは熱帯で、常夏の国と聞 ンでは思いがけないみぞれ、雨まじりの雪が降ったの つったが、 航海の途中、 、暑い筈のアフリカのター て来 プバ

抱きながらケープタウン港を出て二週間程でサントス港に 緯度が似ているブラジルはどうなのかなと一抹の不安を

着、 到着、七月二十九日に上陸し、サントスの潮旅館に一泊 ることになった。 それから間も無い八月初旬に降霜に見舞われてびっくりす 二泊した。その間に荷物を送り出し、直ちに私たちも汽車 でジュキア駅まで下り後は河舟でセッテ・バーラスに到 四、五日の内に、 ロッテを決めて入植となったのだが

話で雪の降る事はないと聞いて雪が降らなければまだ有難 いと思った事であった。 常夏とはいっても案外寒い日もあるものだが、古い人

る事はなかった。 八月が過ぎて九月に入ると早や暖かくなっ て、 霜 \mathcal{O}

あった。親たちは、それ程暮らしにくい処かと心配にな た様子であった。 るのである。貧乏で靴が買えないのかと思うと可愛想で (伐採)に来る労働者は驚いたことにみな素足で仕事に来 それにしても、あの霜のおりる朝も、デルーバ、マ ツト

のに、若しうっかりして素足であの様な木を踏んだらと思 の木が多くて、地下たびでも革靴でも、突き通して大変な 寒さ以外でも、あの地方にはトゲのするどい細いヤシ科 他人事ながら子供心にも心配でならなかった。

いた。 聞 いて見ると、やはり、たまにはトゲがささると言っ て

通ってくるカマラーダ パラナに移って来てからも冬になると、大霜は別 毎年相当に冷える日はあるのであるが、その寒い (労働者) 達に、はだしの者が多い 朝に

のであった。

シャツ一枚で来る者が多く、ボロボロの上着でも着用して くる者は良い方であった 着物も当時は毛糸の物など持っている労働者は居らず、

た。 た寒い日には、 戸外に来て、 そうした薄着で、 大体三キロ位の処から来てくれる人が多かった。こうし 此方の出て来るのを待って居るのであった。 よく母が温いカフェーを一杯飲ませてい 此方が起きたか、どうか の時間 に早や

られない思い出が有るからである。 今日特に霜 の朝の事を書く事にしたのは、次の様な忘れ

な被害を覚悟しながらも、気にかかって暗い内に起き出し 事は分かるし、低地に当たっている私たちの土地では大変 もたらした大霜の朝の事である。毛布の上にふとんを重ね であった。 て表に出て見ると、未だうす暗い処に、親子のカマラー の声で泣くんじゃないと、その子を叱る声がするので驚い てみると、此の早朝に表で子供の泣き声がし、父親か大人 ているのに肩の処へ寒さが入ってくるので相当冷え込んだ (まかれた物を拾う) をした後のルアソンかに来ている (労働者) が、バンニャ、カフエー (採集) か、バレソン それは一九四二年の当時の人には忘れられない大被害を ルアソン(収穫する為に木の下を片付ける) ダ

仕事にかかると言って泣く子を叱りながら道具を持って畠 コヂンニヤに入れて一緒に熱いカフ ェーを飲むと、すぐ

であ あるから、あきらめるのにはまだ良かったのであるが、二 あるから、そうした処にも霜柱が二センチ以上もの高さで 仕事に来てくれたのであった。 日日の更に激しい霜の朝も、 かなくも夢と消えて行ったのではあったが、それは天災で 立っている有様、これではたまらんと思ったが、翌朝は更 て見ると地上に落ちている粒は霜柱の中に埋まっている の方へ登って行った。私も畠のカフェー ひどい霜で、我が家の一千俵のカフェーの収穫予想はは った。カリヤドールの低目の処には先の雨 あのハダシの親子が、未明に のある所まで行 しめりが \mathcal{O}

たが、ハダシの親子のあの朝の姿は末だに忘れられな 大霜の痛手は翌年のセレアエスの豊作で忘れる事が出 \mathcal{O}

その後何とか運命を好転されている事を願 て止まな

第十話

まった。 九四九年六月頃からボツボツとカフ エ \mathcal{O} 収穫が始

付け 当時の日本人の植民地では殆んどの て居り、 その規模の大きい人は契約者、 人が、 カフ 歩合作者、 エ

一生懸命働いていたものであった。 コロ ーノなどを雇っていたが、 白分の家族も労働力

ゼーロスにもなって、それが、元値に暴落するかと私は心 燥には殆んど一ケ月もかかる状態で、 せ、広げては寄せーている頃からカフ あった。 配したが、それが続いたので、いわゆるカフェー景気に湧 に上昇して、 いたのであった。農家は勿論、 般商人までが契約者を入れてカフェーを植付ける始未で 六月は未だ陽が弱く初めにテレーロ 百クルゼーロス程度のものが二百五〇クル お医者さんから、 エーの値だんが日毎 毎日、広げては、 に来たカフェ 弁護士、 寄

た。 が、当時は、 倒されたのであった。 飛び越えて、政府の土地がどんどんと払い下げられて切 イグアスーに向けて見る間に切り倒されていったのであっ の植付、契約者の住宅の建築資金迄も長期に融資されたの 土地さえ買えば、開拓資金として、山切りからカフエー 国際植民地の北パラナ土地会社の五十五万アルケール パラナ州の場合、 開拓開拓と言って奨励されたものであった。 マリンガから、グヮイー 今では此の状態を自然破壊と -ラ方面、 いう 又 ŋ

実が、余りにも莫大な面積であったので、ルピオン氏も不 委任を受けた人達が州有地の払 に職を譲る二、 一九五一、二年頃、州統領 三日前、 いやその前日迄本人は勿論、 のルピオン氏が、次期大統 い下げ書類にサインした事 その

終ったらし 正 をし って、 たとして取調べを受けた。 しいが、その地権が二重、三重になっているも ひどい目に逢った人が相当にいたらしい。 その解決はウヤム P \mathcal{O}

二百ア の人は、白分の買った土地に行って見ると先住者が既に 私もルピオン氏が最後の日にサインした地権を信用し していて、折り合いを付けるのに地代の二重払いをした いった。 ルケール購入したが幸いに問題は起きなかった。

せたにも拘わらず本人には不安の解決が付かなかったので 視察して確認し、カルトーリョに、自分名義に登録を済ま 1 った。 、その土地には先住者のいな 同航海で移住して来た友人は、 い事を本人も、 私の近くに土地を買 私と一 緒

足音に怯えたりする様に自分で不安を想像するもの 体見たり枯尾花。真夜中に淋しく一人歩きしていて自分 あげる事 如き浅学の者では対応は難しく、その不安を取りのぞい そこで本題 が出来なかった。 \mathcal{O} 思思 いよう」 となるのであ る。 幽 には私 \mathcal{O}

たが 頼して調査 局私達はどんどんと開拓 彼は開拓等とても手が付かず、 して貰う事にした。 してカフェーを植付 弁護士 (日系) けて行 を依 0

更にその土地を買った自分に移譲登録が正式にされている 私が思うに弁護士は何を調べる い下げた土地が、受け取った本人に のか、在 任中の州統 登録され 領 が

ŧ あった。枯尾花が幽霊に見えて仕方が無いのである。 査費としてクリチーバへの航空賃が請求されていた様子で のを、どう調査するのか、それが実に十数回に亘って調

が、枯尾花におびえた彼は到頭三十余年のカフェー景気の 恩恵に預かる事が出来なかった。 で買ってたちまちの内に立派なカフェーザールに仕上げた その内にその土地を売る事になったら、近所の者が喜

第十一話

極楽

文ではそのような事を書くつもりではないけれども序だか 後の世界が有るものだ』 いて、どうこうと、 寸書いておこう。 はあるか、 理屈をこねようとは思わないが、『死 ないか、とか、 と思わせられた事がある。此 死後の世界などに付

時からの知り合いで色々とお世話になった人である。当家 では誰かが看病に付き、他の家族はそれぞれ仕事をしてい についているとの事で見舞いに行った。此の人とは入植当 それは或る老人が亡くなった時の事であった。病気で床 その日は私が見舞いに行ったので、

「それでは一寸病人を見ていて下さい。 別に痛がることも

ので、 何か変った事があ ったら、 知らせて下さい。

は老衰みたいに唯、 病人の脇のカデーラ(イス)に腰をかけて見ていた。 言って家から近い所の草取りに行かれて、私一人で 楽そうにすやすやと眠っていた。

出て、 割箸の先に綿を付けたものであげたが間も無く息を引取 ぐ返事があったので私は直ちに部屋に戻って、末期の水を は息を引取るかも知れない』と、思われたので、 ところが一時間もした頃か病人の様子が変った。 であ 大声で「お爺さんが変ったようー」と、叫ぶと、す た。 部屋から 『これ

が家族の死は哀しいもので、死体に取りすがって泣きだす バタバタと入ってきた家族は、来る時が来たので すゝり泣く者。 は あ る

きたのである。 の様な事には一度も行き当った事はないのである。 それは何処の家にも起る状景であるが、この時奇蹟が 私は今八十才を越えたのであるが、

のである。 の冷え切った死体が『にっこり』と家族全員の前で笑った 死後十数分過ぎて、まだ家族が泣き哀しんでいる時、そ 家族 全くうれしそうに笑ったのである。それを見た の皆さんも一様に

『お爺さんは信仰の深い人であったので死んで極楽に行き 仏さまにお迎えされてうれしそうに笑われたのに違

が、 あの時はそう思ったのであった。 思えたのである。 末だに地獄極楽の 有無は解らな

笑いとは関係無 今日此 てお の文 \mathcal{O} いたのでよろしく願います。 1 極楽という題では、此のお爺さん のであるが、一寸忘れられない思い出な の死 後 \mathcal{O}

(コーヒー園) いる合栄植民地 一九六〇年に私はカンベ郡とミラセル を買った。 の中に七〇アルケールの既成カフ 郡にまたが エザー 0

えて行くもので、そこら一面に生えているのであった。 である。 ていると、グラジオラスに似た葉の草が沢山生えている ので、カフ 前地主に嫌気が来ていて手入れが悪く大変に荒れ 口 (コーヒー この草、根に大豆粒程の球根が沢山ついていて増 ェザールはもちろんながら、 の乾燥場) のまわりをリンパ 住宅の周囲からテ (清掃) \mathcal{O}

も無 やす事に専念していたところが、此の草が大変広い面積に 繁って他の草を圧えてくれる始末で、その内にこの草が んな花を咲かせてくれるか、 特にテレーロの石垣の間などに沢山生えていて絶せそう いので、此の草はそのままにして置いて、 期待される様になってき 他の草をた

良く一斉に真赤な花を咲かせたのであった。 それが、三、 四年過ぎた頃か、 もう少しし てから カ 11

花が 数え切れな かなりに広い面積であり、一面に濃い緑の葉に強 咲いたの しさに魅せられたのであった。何万いや何十万株か い数の花が、大小にかかわらず全部に真紅 で、 ファゼンダ (耕地) に着くと、 瞬 · の 花 そ

を咲かせたのである。

斯く有るか』と、 【んだお爺さんの笑顔を見た時と同じ様に『極楽の庭は 思ったのである。

まっ の出来なかった此の草が、ただの一本も残らず枯れてし そして奇蹟は、その後におきたのである。 て再び生えてくる事はなく既に三十数年を経たのであ の花が枯れていくと、 たやそうとして、 一ヶ月余咲 たやす事

が げにして、只の一個の種も残さずに消えてしまったのであ 、此の世で見る事の田来ない様な美くしい花を置きみや 絶やそうとして絶やすことの出来なかったしぶとい

私は不思議なものを見せて頂いたのである。

あれは極楽の花園であったのかも知れない。

解けないのである。 は、それは美くしい花を咲かせて、何故種を残さずに消え てしまったのか、 何万株、 何十万株か数え切れなく有ったも 全く不思議であり、 この不思議は末だに

は全然根のつながっていない物が全部枯れてしまって早三 つながっている物は全部枯れる事はあるが、種を落として 余年未だに一株も生えてこないのである。 ブラジルでも地下茎でつながっている竹が枯れる時は、 新らしく生れてきている。然し此の花の場合

気持ちでもある。 の不思議、今になっては学問的に解決して欲 しくない

第十二話 馬鹿げた考え



払えとの強い談判であった。 処か、一ヶ年の利子と、次年度のプレスタソン 当の住宅を建てゝあるのに会社は支払金の払い戻しをする ラジル初年度のセッテ・バーラス植民地では喰い込み農業 て、我々は二アルケールの開拓をして、粗末でも、それ相 であったし、海外興業株式会社の土地代支払い分に対し 九三四年にロンドリーナの原始林に移って来たが、ブ (年賦)を

草刈 本から持参した品物を売り喰いする状態であった。 わす資金は誰もなく、婦人から少年少女迄フォイセでの下 は現地に来てから鬱蒼とした大原始林の開拓を他人に請負 りなど手伝わす始末であり、それでも足りない ナへ来てからの開拓資金をもぎ取られた同航者三家族 植民係りであ 0 たが、 無慈悲な此 の係員にロ

教えて頂いたものであった。 か、米は出穂期にセッカ(日照)に合うと全滅の事が有る から二度、三度に分けて植える様に等と手に取る様にして 収穫には確実性 (棉)も植えた。金目ではアルゴドンにかなわないので、 それでも親切な人もいて、 ア ロース (稲) ミーリョ (トウモロコシ) にアルゴド の高いミーリョを余計に植えても不利だと 蒔付けには色々と教えられ

変に順調に降雨が有って、総ての物が豊作であっ ところが、親切に教えられて植付はしたが、その年は大 った。 て、

当に収穫 からは食料と経済的な心配はなくなった。 したのか、 然し九人家族で食糧確保に心配した父は、どこから入 した。とに角総てのものが良く出来たので次年 小豆、 稲キビ、 栗ソバ等迄植えて、それぞれ相 度

で不自由 であったが、我が家では前年度の米を沢山残 然しその翌年はセッカ (大早魅) で米の収穫は全滅し しなかった。 て置

前置きが長くなり過ぎた様であるが、 初年度に教

良く出来て、 喜んだものであった。 えられて植えたアルゴドン(棉) (十五キロ)が十二、三ミルレースで、籾一俵半程の値で 現金収入に大変助かった、 がこれ又、消毒も 値段もアロ せずに バ

出て来た。 此の棉を売る時に、 表題の 『馬鹿げた考え』をする者 が

(ビン) 植当時で倉庫らしい保存する場所がないので、一人でト 詰めをしているのである。三リットル半入れのガラポン 霧をかけている音がした。何にかけているのかと不審に思 なら一寸手伝って来るように言われて、私が出掛けて、そ 棉の俵詰めは穀物と違って手間がか、るので、父親が近所 ラック一台分などとはとても荷がなく隣近所数家族共同で に私は驚ろいた。 いながら角を曲ると、家の前で、小さな子供相手に棉の袋 の家の横迄行くと、水を口に含んでプッープッーと何かに の働き手の不足する人の処へ、荷が出来たか、おくれる様 トラック一台雇える位をまとめては時々売るのであった。 の収穫は開いた棉を摘むので収穫は案外長く、各自入 に水を持 って来ていて、 霧をかけながらの袋詰め

るのであ 「こうして詰めると良く詰る」 った。 ٤, 言い 乍ら尚も続 け 5

をかけて出荷して、工場で露見したら恥をかかないかと他 らしまっていたが、此の人は乾いている品物にわざわざ霧 人事ながら心配させられた。袋詰した物を一方に積み重ね 私の家では朝の露の有る内に摘んだ棉は 一日乾燥 7

る は比べ物にならないのである。 のに手伝 ったらドシッとしていて重い事は私の家の物と

増加した目方は三リットル半の水を五俵にも十俵にも分け 鹿げた考え』をしたものであった。 あるから、 てかけているので、一俵に一キロの水も入っていないので で実物がそれだけ余分に入っているのであり、ゴマ化して 然し考えて見れば水を含ませたので締りが良く詰 恥をかくかも知れない心配料にもならない『馬 0

も一しょにいたので気まずい思いをした。 はすぐに見つかり水で増えた何倍もの値引きをされた。私 さて、いよいよ出荷の時であるが、案の定此の人の水分

馬鹿げた考えをする者がいるものである。

が付かないのは浅はかであると思った。 それも子供 の前でして、その子供がどう育って行くか気

来たものだとい なアポーブラ(南瓜) コ 、プラド ってチジョーロ (買手)の秤りの脇には棉 が数個置いて有った。 (煉瓦) が四・ \mathcal{O} 袋につ 五枚と大き \Diamond

バナナが出てきたのはあいきょうであった。

出荷 棉 の袋の中に入れて置けば早くうれようと思って入れて の時迄に取り出すのを忘れたものであろう。

第十三話 口 ッカの発生

も知れないので気を付けておくようにと、組合からの通知 る虫が湧いているのでその内に皆さんの近くに見つかるか であった。 一九四六・七年頃か、ブラジルにもカフェーの実を食べ

考に見ておけり 『その虫なら私のカフェザールに既に発生しているから参 思って安心していたが、或る日隣りの英国人のファゼンダ へ遊びに行って、主人のフレーザ氏にその話をすると、 然し新開地のパラナではそうそう急に発生もすまいと

ろいたのであった。私は リットル位なっていたが、その殆んどに虫が入っていて驚 と云われるので案内して頂いて見ると一様に赤い実が十

『何故この木の実を早くちぎって焼却しないのか』

というと、

『此処にいる事は、そこらにもいる事で仕方の無い事だ。 その内に消毒する事になるだろうからそれで良いのだ』 られたのであった。 との返事であったが、なんとも気持ちの悪い思いをさせ

視察者を募集してオウリーニョスから余り遠くないシャバ ンテスのパルメイラ耕地へブロツカの消毒事情を視察に それから間も無い内に組合で (ロンドリーナ産業組合)

行ったのであった。

ので、 二・三年注意をしていたが、私の畠には当分見つからな むように注意したいものと考えながら帰って来た。その後 を徹底的に消毒する様にして、畠一面の消毒はしなくてす らないという事であったが、今迄無消毒であったカ 分においの強い薬で驚いたが、人体への影響は非常に少 かった。 しながら、とに角発生に気を付けて、見つけたらその周辺 い。先ず無害の様なもので安心だが虫の成長が一ヶ月位な りであるから、なんとも嫌な事になってきたものと心 此の時始めてBHCという消毒薬を知るのであった。随 一ヶ月以内に次々と三回かければ、殆んど心配は 工

上りする一九四九年が来た。 それから間もなくカフェー景気の前兆として日に日に 値

迄あがったかと思う。 収穫中に百クルゼーロスから、二百を越えて二百五十 位

れでも或る程度の収入があってカフェー景気に乗せてもら でその何倍かのファゼンダを購入して移転 の収穫は本家との歩合でたいした事はなかったが、そ り、親から頂いた土地は本家に譲り、私達は三人

ッカが発生してきて、いやおうなしに消毒せざるを得な 調子に乗ってバタバタしている間にそこ此処となく った。

で、相当に薬を散布しても充分に利益を残してくれ エ 一景気に乗っているという事は有難 ていた いも

のであった。

年引続 いて仕事の拡張で既成コ ヒ 園を購入

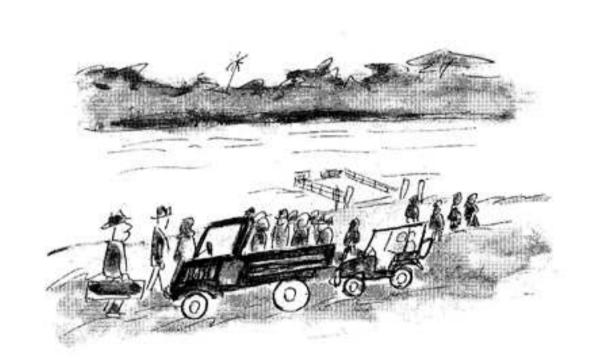
スコ 度 が有ったのであるから景気に乗っているという事は な粒は無 の収穫は百%と思われる程ブロ 此 ーリャ である。 耕 い様なもので、精選されたカフェーは殆んどが は (砕け粒) であったが、それでいて予定 日 本人 \mathcal{O} 所有であ 0 ッカに喰われていて満足 たが、手入れ 有難 の純益 工

る。 地が自分の手に入ってからは早速消毒にかかったのであ 然し虫喰いばかりでは利益はあがっ ても損である から耕

落ちて行き、カフ 機械化農に変貌して行くのであった。 点を補 てきて、苦労が一段ときびしくなると共にカフェー景気が であるが更にフェルージョン (サビ病) が追い打ちをかけ のウジがうすい葉の中に入って苦労させられる事になる 此の頃からブロ い切れずカフェーの王座を他州に譲って大豆小麦 ェーで栄えたさしものパラナも寒さの ッカと共にビッショ・ミネ ロと云う

安心 に文明が急速に発達する時代では尚更である。 世の中とは て居れるという事はむずかしいのである。現代の様 \ \ つまでも同じ仕事の上にあぐらをかい

第十四話 水害



若し有ったとしても、それは全く僅かのことであった。日本の様に川の氾濫とか崖崩れというような災害は稀で、 農地は殆んどが波状形の土地であったので、大雨が来ても ない限り無かったのは地形の恩恵であった。 家が大水で流される等という事も余程危い処に住んでい 日本移民がその初期に活躍したサンパウロ・パラナ州の

受けた家も無 それでも大きい河 いという事ではない。 の辺りでは思いがけない増水に被害を

げてある処の手前の高い処に車を止める事になった。 る為にフィーラ (行列) が出来ていて、 ゾ・デ・ノルテを通ってイバイ河のバルサ (渡し舟)を渡 てロンドンに出る事が多かったが、或る時そのバルサに乗 私 の驚いたのは、マリンガからノーバ・ パラナを過ぎてタンボアーラに出て、パライ 川に向って掘 エスペランサ、

時此 構え でい など避難準備をする間が無く驚ろいたとの事であったが、 くと、夜中に突然上方の森林中から来て家財道具や商品 右側にはバラツカ建てのボテコ(小店)が四・五軒並ん た私達も、 の店が有ったので入って見ると二メートル余の高さ迄 たが、左手の尚少し高い処に煉瓦建てのしっかりした かと思う処である。水は次第に増水して来たものかと た。普段の川面より十余メートルやゝ二十メートルも 処迄突然水が入って来てひどい目にあったとの事で ついた様なよごれが有るので尋ねると、先日の増水 のであった。 この高さで尚水害にか、ったかと意外に 事実は下の河の増水であったのであ \mathcal{O}

ろしい災難にあ った。 それにしても人間とは愚かな者かと思ったのは、 **乍ら、尚その店で商売を続けてい** . る 事 で この

私達は此 此処のバルサ 処の 対岸の (渡し舟) 地 区に耕地 とマリンガからシア の開 拓をし ていた ルテ廻

カン 府 ルサ りをする事 今ではすべて石橋が架って便利になっているが当時はバ 融資書類 で不便であ ・モウロ が あ の登録の都合でもう一つ上流のマリンガから った。 Ś 間 0 のバ で一つ上流 ルサの世話になったものである。 のバ ルサに、更に地権と政

だ。 百キ 測って見て尚増水中だと分ったら、ガックンだ。諦め 者、近い処の者は家に帰る者、 流で大雨が降 事ではなく、何時間もかけてやっとバルサまで来ると、 に張ってある為少々増水しても渡れるのであった。 河することが有った。そこはバルサ用のワイヤーを高 百余キロを迂廻して 水する迄待つという者、 いう場面に時々出合うのであった。『いつ頃渡れると思う と聞 仕方なく川面迄降りて、今尚増水中か減水し始めた ルサで渡る ロも上流でどの位の雨が降ったのか解らないでいる いて見るが、 ったらしく増水してバルサを出せない。と、 のに時間も金もか、るから不都合だとい マリンガーシアノルテのバルサで渡 聞くのも無理な話だ。二百キロも三 町迄戻ってホテルに泊るとい と色々であるが、 私達は二 て減 . う か

も知れな 近 二百余キ い遠廻 り ロの迂廻はバルサ迄の距離で、全体では三百キ であるが、いきたい一心と若い力であ

契約書 で行く処を六時間かく な事も経験 の登録は、 随分通ったものであったが、今は二時 していた。 つたので、朝の二時半前に出 又 カンポ ・ デ ・ モロン 間

此の道 て、 利用で大水に て九 番乗りで受付けて頂いて、その日の内に終らせてもらっ 午後 時 い物ではあ のカ ルサが或る時木造の橋に替っていて、狭い一寸 流されたとの事であ ったが助か 一時頃迄には帰宅していたのであるが -リオ (役所) の開く前に到着してい っていたのであるが、僅かの った。

あ 引っかかると、 るから尚更である。 それに杭までが木材では水が増す毎に浮力が増すのであ 大雨で増水した時に岸辺の大木が流されて来て橋ゲタに の大きな河ではどう考えても木造の橋では無理である。 今ではどこも立派なコンクリートの橋になっているが 橋を押す力が大きくなって耐えられない。

欲 昔の者は橋毎にバルサ賃を払っても良いから橋を架け しいと思ったものであった。 Ź

に渡 話していると、 政府に金が無いなら誰か資本家に架けさせてバル いものだ。」という人がいたが、そうかも知れな り賃を何十年か取らせるなら造る人も居るだろうに 「バルサは許可になるが、 橋は許可になら サ

国内の橋で渡り賃を払った覚えはない。

さを感じられないのではないか。 いと思うが、昔のバルサの苦労を知らない者には橋の サン ていて大雨、大水の事が気にかからなくなって全く有難 パウロ州とパラナ州を主にして暮らす私には、旅行

点に於い そうしてみると、私たち初期の移民は、 て後輩より幸せである事を喜びたい。 現在を喜ば る

第十五話 三本足は危ない



テーブルやカデーラ (腰かけ) の三本足の事を一寸書いて 三つ車の物があって、時々転んで怪我をした人もいたので の足の下にキャスターの付いている、あれでも初の頃には 見たいのである。今頃の事務所に使用されている回転イス のである。 った。最近では四個か五個の車が付いていて安定してい 三本足と言っても一寸何の事か分りにくいと思うが、

ところが開拓時代にはその様な立派なものどころか、カ

デーラと名の付く一人がけのイスが家庭に入って来るにも 相当年数がかかった。

に替る迄にも何年もか、つたのであった。 ミット(椰子)を並べて使用していたもので、メー て、メーザ(テーブル)もバンコ(腰掛け) 当時十軒が十軒ながら土間に丸太をぶち込んで足に も割ったパ -ザが板

の事であった。 従ってバンコがカデーラ(イス)に替わるのはもっと後

なったからか、ミーリョのパーリヤ (トウモロコシの皮) れた物であるが今では殆んど見られなくなった。 で編む様になった。案外丈夫であったし、相当長い間使わ んであ 当時は簡単な骨組にガマの葉の乾燥したものをよじって った物が多かった。 その内にガマの葉が少なく

ラに利用したり、空かんに植えた草花の台にしたりしたも のバンコの時代に、父が幾つかたおした木の三本股にな のであった。今頃なら一寸風流な物の一つと思えるだろ て枝の出ている処を切り取って逆さにして三本足のカデー そうした簡単なカデーラさへ家庭に入る前のパルミット

あった。 当時としても便利であったし、 私たちも喜んだもので

ところが此 の三本足のバンコで父が怪我をしてしまっ

家の軒先に草花を植えたラチンニャ (空かん) をぶら

返ったのであった。 た、三本足の台を利用して登った所が、ふらついて引繰 下げようとして、一寸手が届かないので、花 の台にしてい り

٢, た。 も、父の言う通りに両手でしっかりと握って力一杯引張る が反対側を向いているのである。私はびっくりしながら が良い熱取りだと言って 「べったり」 言い母に麦粉を卵の白みとビナーグレ(酢)で練ってこれ ら、力を入れて引張れ」と言うのであった。見ると、手首 れで何事もなく治ってしまったのであった。 若ければ飛び降りるだろうが、そうはいかずに手をつ 近くにいた私を呼んで、「手首がこんな事になったか 父が自分の方でねじって、「これで良いだろう。」と、 と当てがって、そ

表がある。と言われるので尋ねて見ると、板の切り口を見 近亡くなられた松村翁に大きな板に字を彫って頂く事に たのに、こゝで、こんな間違いをしたと言って二つ三つ と言う物を逆さに使うものではないと親から聞かされてい にして使う場合は仕方がないが、丸太で使う場合には、 であるから、はっきりと逆さにして台に使っている。 その時、 った台を割ってレーニヤ(薪)にしてしまった。そんな 注意をしなければならない。それと、此の台は木の枝 なくともと思って見ていたが、数年程前になって、 その年輪の工合から、 彫刻師は板の裏に彫物はしない。板一枚にも裏 父が言うのに、三本足の物は一寸不安定な 芯に向いている方を裏といい、 最 木

裏面を表にはしないものだと説明されて驚ろいたものであ かけて仕上げても、裏よりは美しく仕上がるものであり、 表皮の方に向いている面を表と云う。表の方が、カンナを

と、こうした昔の人の考え方にもうなずける点があってう れしいものである。 時代的に合わない話の様ではあるが、此方が老いて見る

柱を引き割る時など、上と下が逆さにならない注意が払ら われているのではないかと思う。 或いは伊勢神官の御遷宮の折などの社の建立になると、

佇む前に早、 そうした柱一本板一枚に心が使われているから、社前に 神々しさに心がうたれるのかも知れない。

第十六話

亡霊

枯尾花的ものに気持の悪い思いをさせられる事はあるもの 幽霊の正体見たり枯尾花』という事であるけれども、

の家で青年の集りがあって、 二十五・六才の頃であった。 夜が更けてかち一人徒歩で 四キロ程のフレ ーザの

帰 土地 それで急いで帰ろうと急ぎ足で歩くと、後の音も急いでつ 見ると誰もいない、 る足音がするのである。 園) を横切る頃迄は月明りで何事も感じずに来たが、私 しさを誘 て来るのである。 って来た。 フレーザ(フレーザ耕地) の近くになると、片方がマット (作道) を通って来たのか忘れたが、次にファゼン ったのかも知れない。気が付くと後から誰かヾ来 植民地内は誰れのシッチオ(土地) ふり向くと誰もいない。 おかしいな、と思う心が不安を呼ぶ、 「誰かな」と、思ってふり向いて のカフ (森) であったのが淋 エザール(コーヒー のカリヤ

あるものだから覚えておけと言われたのはこの事かと気が 人で淋しく歩いていると自分の足音におどろかされる事が いて楽になったのであるが、それでもまだ何回か振 そこで思いだしたのであるが、父が在世の頃、夜道を一 て見たのであった。 り向

私は父から聞いていたので早く安心出来たが、 いと不安な気持にされるものである。 予備知識

有った。 る人 る。名前を光太郎といって本家の仏だんには小さな位牌が 私はその時八才であった。 で亡くなっ 人は先年亡くなった貞作君を長男に、私を次男と思 私たち兄弟は早く長男と次男を無くしていたので近所の が多いのであるが、 たので私たちきょうだいは誰も知らないのであ 本当の長男は十八才で亡くなり、 次男などは、二ヶ月位の短い命 0

らしく急に亡くなったらしいのである。 たらしい。風邪を引いたと思っていたのが肺炎をおこした 此 の赤ん坊が亡くなった後、母には少し神経衰弱に罹っ

ている うのだから神経衰弱になるのも無理が無い。 が、四十九日の法要をすませても見えてしかたがないとい 日までは霊が家に居るという事だからと、 葬式を済せてから何日たっても部屋に入ると光太郎がね のが見えてしかたがないというのであった。四十九 我慢していた

海道に渡って来たという人で、どちらかと言へば気 人であったが、母の愛情というものであったらう。 母は十八才の時親きょうだいと水盃で別れをして単身北

た。 教を聞く事を「今夜は何家でござが敷かれます」と、言っ たようである。 そうして半年か一年位かする内にいとこに当る僧侶が福 (郷里) の方から布教に見えて近所で『御座』が敷かれ 『御座』 とは信者の誰かの家に信者たちが集まって説

たらしい。 自分のいとこであるから自然我が家を宿にして世話をし

下さったらしいのであるが、それで母の目に見えてしかた の無かった赤ん坊の幻が見えなくなったと言う母の話で 「それでは良く成仏するように供養をしてあげよう。」 った。 その時に父が妻の事を話すと、 言って、丁ねいに長いお経をあげて、おまいりして その僧侶が

職として勤めて居られた。 凡真寺の名称で建立され、三年程してからロンドリーナに その母も亡くなって数年して、ロンドリーナに本願寺が してきて、或る日お寺を尋ねると、 清原秀言先生が住

はそうした力の有る事を話すと、先生は、 そこで先生とよも山話の末に母と亡霊に付 いて、 お経

持が落ち着いた結果、亡くした赤ちゃんの事が諦められる 事になったという事はあるでしょう」 ない。が唯、お経をあげてもらった事によって、 「一寸お待ちなさい、お経にはそうした力の有るも 母 親 \mathcal{O} の気

いるのである。 であれば、葬式にも、 と、言う事であった。その通りで、お経に効果があ 四十九日にもお経はあげてもらって る \mathcal{O}

花に怯える ばならないと言う事であろう。 る時に起る一つの現象でふだんに真実を聞いて置かなけれ 要は自分の心次第なのだ。亡霊に悩まされるのも、 のも、 自分の足音に怖れる の も、 心に不安のあ

第十七話 フォリンニャ



フ 今年 い物、既に何十年と私達の生活の中から消えて久しい物 オリンニャ これが縁で昔の事を思い出すのであった。 一九九五年の研修生が、 (カレンダー) を持って来てくれて、 みやげに、立派な日めくり 珍ら

が、 紙に取り付けなければならない。それが三百数十枚の日め 数十年前の渡伯当時幾つかのフォリンャを頂くのである 此方の日めくりは、台紙と別になっていて、 此方で台

ので、 斜めに入りたがって困ったものであった。 日 で十二月三十一日の紙の裏にのりを付けて貼った位では くりで六センチに十センチ厚さが三~四センチ位 っても三センチもあるとなかなか簡単にはさ、らな 一枚づつはがして行く動作もあるので、とても持たな 台紙の裏から釘で打ちつけていたが、これが又紙と \mathcal{O} 物な 毎

ラ 分の味わいの一つであった。 それでも新らしいフオリンニヤが張られると粗末な (居間) でも、 一寸気持ちの良い物で、それが新年の気 サ

数枚も張ってバレーデ (壁) する家も有ったものである。 家によっては取引きが多いと言う事か、サー の塗り替えをした様な気分 ラだ け でも \mathcal{O}

Ŕ なけ をマルカ(記入)するにはペラペラと、 た時代であるから、 ればならなかった事を思い出すのである。 ニャが、日めくりであるから毎朝々々一枚づつは 然し新年が来て苦労して釘を打って張り替えたフ は ればならな いでない日もあったりするし、二、三ヶ月後 いのであるが、今と違ってのんびり 私の家では、どうかすると三日も めく って捜さなけ で行か \mathcal{O} 才 用 匹日 IJ 事

は便利だと喜んだものであった。それが十二、三年前 あらっ 一枚の紙に十二ヶ月のカレンダの印刷された物を頂 ・ンダー 三枚は頂くので助かっている。 たまたま月めくりのカレンダー 」と思 -が無いと大変だと思うが幸いに私の処では ったが、 此れが仲々に便利で、 が貰えた時は、 今では

たので、昔の日めくりをどうして止めたかと聞くと誰も釘 で打った事は覚えているが、その後をどうしたかという事 此 はっきり覚えていないのであった。 の文を書かうと思った或る日、弟と友人と三人で集

思われる。 も、その中に釘の頭は台紙を破ってカレンダが落ちる 台紙 の後から釘を打ったとすると、その時は 止 0 7 かと

がはっきりしているのである。台紙にどうして止めたか 筈であるが、とに角私の家では釘で止めた。その記憶があ が、考えてみると、 めて置いて、日めくりは別な処で釘を打ってきて台 記憶はない。 んでいた人も居た事であるから、もっと良い方法が有 いうのであ 弟が云うにはカレンダの台紙を先きに小さな釘で くりをあてがう処に当て、壁に直接打ち込んだだらう 釘は曲らない っった。 壁がヤシの木か板の時はそれでも良い 既にマテリアール のに、暦の方がねじれて困 (煉瓦建)の家に住 った覚え 壁に 紙 た 日

 \mathcal{O} 此 で昔の事を思い出 の度、今では骨董品になっている筈の しているの である。 日 8 くりを頂

がる老人の為にか親切を通り越す程色々な事を書いてある も骨董品 であ 此のころ頂いた日めくり唯、三百六十五枚 0 た。 の価値充分なのに、商品価値を高める為か、 \mathcal{O} 日付だけ 懐

例をあげると、

年号 平成 西暦

月名 三月 M A R C H 英

三 日 日本名 英名

四 暦 の日付

一十八宿 ―その占

六五、 六輝=大安、 友引など

七、 九星=一白、 二黒など、

八 十二支=日毎にネ、牛、 トラ

教訓があり、その上に、その月のカレンダーが小さく載せ きのと・・ てあるのである。 尚 十干=といって日毎に、 ・とあり、 更に、その日その日の心構えに対する ひのえ、 ひのと、 きのえ、

白にメモ欄が付されているのであるから驚ろきである。 全く至れり尽せりの親切の上、更に暦の三分の一程 \mathcal{O}

あるのである。 十七センチ、一ケ月のカレンダーに充分間に合う大きさが んと一日一枚のコヨミの大きさが、横二十センチにタテニ そこで、その暦の大きさと言う事になるのであるが、 何

ではないかとも思う。 日本の経済力を表わ している様でもあるが少し行き過ぎ

然しこの暦のおかげで昔の事を思い出させてもらっ た \mathcal{O}

大久保昭二君のサーラに巾38センチに縦52センチの超 ここで此の項は終っ たつもりでいたら、 この頃、友人の

貰って来たのであるが、なんと一 なかったのである。 過ぎではないかと思う。すでに四月になっているのに彼も 「もったいない。」と思ったのであろうと思う。 はぐる気になれなかったのであろう。表紙さえもはぐ の目方である。珍らしいとはいうもののこれこそ少し行き 大型日めくりが掛けてあって大変珍らしく我 毎日毎日大きな紙を捨てていくのは 個の日めくり暦が三キ 々の学校 って 口

事に驚かされるのである。国家の経済成長には或る程度 現在のぶらじるの事など思うと、日本の経済力の発展した そう思える事に度々出逢う事がある。 国民の無駄使いが必要なのかも知れない。訪日して見ると そこで考えさせられるのであるが、昭和初期 $\widehat{\mathcal{O}}$ 日本や

第十八話

をはさんで約二アルケーレス位をデルバされて焼か にパルミットの住宅が立っ 中央区の第一組の入口の本多氏のロッテが我々の連絡道 た。

約者が来た。 と思う。 本多氏が来られるのかと思っていると、Sさんという契 此方生まれの子供の様であった。 七・八才の少年と四・五才の女の子が居たか

のS氏が焼きあとの枝片付けをしたり出てくるブ

月になってもプランタ(蒔付)をしないのである。 タ(木の芽)をカルピしたりするが、十月になっても十一

にS家へ立ち寄ったのであった。 他人の事ながら私の父は気になったらしく私と町の帰 り

豊作だった経験があるので、それまで待っているのです。」 ないのですか」 と尋ねると、S氏は 「私は二月に植えて ます」との返事、そこで父が、「それでは伺いますが、此 か」と、切り出すとS氏は、「私はアロース(米)を植え ちょっとお伺いしたいが、お宅では何を植える考えです くれますが、お宅では畠が出来ているのに、どうして植え の辺の人はアロースは九月から十月に植える様にと教えて と言った。 エーを頂きながら世間話の末、父が「それはそうと

ジルは面白い処ですなあ。」 「そうですか、二月植えても良く取れるものですが、 という事でカフェーをよばれて帰って来た事であった。 ブラ

たがないからする事で、 も間に合わない場合に少々おくれて植えるという事はしか 限り時期というものを大切にしなければいかん、どうして 年には、時期はずれに植えても出来る事はあるが、長い間 の経験で時期というものが考え付かれたのだから、出来る その帰り道の父の話であるが、作物というものは、 と言う事であった。 時期はずれをねらう事は間違

S氏のアロースは、ファリヤ (間切れ) はするもの、 出

穂に 雨不足で、 見るも無残な事になって気の毒であ 0

うどミーリョ(トウモロコシ)をうでたところに、到着し 訪ねた時 後に畠に出て見ると砂の多い余り良くない土地であるが ら、此のミーリョは水をかけて作った物かと尋ねるとカフ るが、気が付いて見るとミーリョの時期でないのであるか ミーリョは案外に立派に出来ていたので感心した。 エーザール て先ずミーリョのゆでたものをいただく事になったのであ それから、ずっと後 か事、 (コーヒー園) 五月始め頃の天気のよい日であ の事であるが、ノロエステの知人を に普通に植えたものだという。 0 ちよ

ところが此の人に後日談がある。

がむずかしくなっている。 やっていかれず町に引越しされたが、今では子孫も捜す ら、たまらない。当らない事の方が多いのである。 て行ったのである。前文のS氏も数年をへずして農業では 金不足、経営不能となって、他人に雇われる生活へと下っ に変っても、毎年時期はずれのおそ蒔きをする 氏は後にパラナ州に移って来られたが大豆小麦作の経営 のであ 忽ち資 る

されたものであるから大切にしなければならないと思う。 お互いに時期というものは多くの人の体験から見付け H



サン・ルイスへ行く道から分れる処から手前のパリヤーノ 氏の土地であった。 一九四七年頃で、場所はロレーナ植民地へ入る道が -ナに飛行場が出来て旅客機が来る様になった

舗装されていない為にポエーラ(土埃)を巻き上げ乍ら

発着 と思う。 た様にも思うが、せいぜい二十人乗り位 ていたわけであり、相当大きな飛行機が発着 のも \mathcal{O} であ 0 た事

が 私は、二、三回誰かを迎えに行 私が乗った覚えはない 0 た覚えが カュ す か に あ

行機で初着陸して航路を開き、翌四十八年三月から 十七年五月十五日Real ふと思 v i a い付いて、開拓十五周年誌を開 В rasil社も加わった。 S\A社が二十二人乗りの 1 て見ると 九 r

ロもあ 時間を要していたものが二時間に短縮されたのであ 喜んだわけであるが、此のパリヤーノの空港は の工事に掛ったのであった。 それ迄は、 って不便だという事から同四十七年には既に現空港 ロンドリーナ、サンパウロ 間 は汽 車 町から八キ る から

本人が犠 新空港は日系植民地の第一 性にな った 区に選定されたの で大勢 \mathcal{O} 日

制買収された為に、 有利な判決 一期 の工事に六十七アルケール、少し無理な値段で強 の有った話は聞かな 相当長い間裁判されたの か った。 であ ったが、

裁 裁判などするより、支払うという金額を早く貰 事をした方が良くははないかと注意をしてみたが、隣 いう事で乗りかヽつた以上仕方が無からうと見てい た。ことわざにある通り、『附き合いなら家も焼け』 でする事で、自分だけ抜ける事は出来ないとの事 った話を聞 たので、その中の 一知人に政府相 つて次

が、 期待 に添 0 た結果は出なか 0 た様であ 0 た。

た様なか 終戦直後であったので敗戦側 っこうであ った。 の日本人として犠牲にされ

う。 番に思い出されるのは飛魚の古橋選手一行の歓迎であら 話 を元に戻し てパ リヤー 空港であるが、あ \mathcal{O} 空港

が、その覚えがないのは、ポエーラを考えて逸ち早く引き たが、それは別として相当の出迎人であった。 上げていたのかも知れない。 日であったから帰りは大変なポエーラであった筈であ 当時まだ戦勝組 の熱血漢が一隅に集団して熱を上げ 天気の良

の時程 月の事であ だ大変な熱をあげていた。勝組の連中が落ち着いて生業に スポーツ選手にしろ芸能人にしろぶらじるを訪問 を離 様になったのは何年頃であったのであろうか、その 終戦後間 の歓迎を受けた人は居ないであろう。 れて行ったので結局はいつ頃と明白には判らな った。 らう。 \mathcal{O} 無い時であったが、その終末は同志がボ 終戦後五ヶ年を経ていたが、 一九五 戦勝 組 〇年三 がま 組

うテ ていたのであったが、当パラナ州に於いては、 ずれにしても戦勝派の意地っ張りは相当の後迄尾を引 行為に迄走らなかった事は幸い であった。 暗殺とい

近くに移ってくれて、一区の植民者は犠牲になったが にしても八キロ離れた空港は何かと不便であ 0

般 今はパリヤー の者には大変便利になって喜ばれたのである。 ノもアスファルトで舗装されたが、やは

り

近い 方が良い。 でに書いておくが、現空港も再び元のパリヤ

港 が賢明である。 夢の様な話であるが、地形の良い地所は予定して置いた方 市が百万都市にでも到達してからの事であらうから、今は 図面 更に四・五キロ彼方に移転の予定図が早くから市 に 画かれているのである。然しそれはロンドリー 役所 ナ

第二十話

M 程 もいいという事で、これを朝礼と名付けて始めた。 朝講堂まで来る事にしようではないか、通りに面して五 五年した頃、比較的に暇の有る年よりが、運動 ン(道徳科学研究者) 早、 の歩道には並木があるのでその落葉を掃いたりする 十数年前の事であるが、ロンドリーナにモラロ のより所として講堂が出来て四・ の為にも毎

まで続いているのである。

その朝礼なるものにその後、ラジオ体操も加えて、

日

車の直径十センチ程のロラメントを手製で取付てガラガラ 箱をもらってくるのであらうが山程摘んで帰る事を練 と引いてきて二百M程下方に出来たスーパーから厚紙の空 は交通量も少なく静かな講堂前を、大きな板の空箱に古い している親子が居た。 その朝礼が始まって、一年程した頃か、毎朝の様に当時

けた。 或る日、 朝礼仲間の年長の田端氏が、その親子に声をか

なるかね」と尋ねたのである。 「ボン・ジーヤ ・あなた方、 (お早よう) その厚紙を集めて日に幾ら位の収入に 挨拶を交した後、

たものだ、気の毒に、と思ってヒヤリとした。 私は傍にいて貧しい生活をしている人に失礼な事を聞 1

と、相手の親子は車を止めて

村の労働賃銀よりは少し良いかと思われる・ 日によってさまざまで、 幾らとは決らないが、

との返事であった。

思ったら更に田端氏から次の質間が出た。 「ああ、そうですか」 と、 田端氏の話はそれで切れるかと

を持っているのですか、希望がありますか」 ・それで、 あなたたちは将来に対して、

と、質間した。

生活をしている人に、『どんな希望を持っていますか は、余りにも見下げていると言うか、私にはとても口に出 私は再びヒヤリとした。社会の底辺の様な紙クズ拾

すると、こわ如何に、 来ない言葉であったが、田端氏は何のこだわりもなく質間 である。 誠に思いがけない返事が返って来た

買い取る事にしたいと思っているのです。』 その内に自分でデポジトを持って大勢の人の集めたものを 貫ってもらうのですが、それでは幾らにもならないので、 はこうして集めては、デポジト 少しづつではあるが、ポウパンサ貯金 (簡易貯金)をして、 『どんな希望を持っているかと聞かれれば、私たちは今 (問屋) に持って行って

と、言う言葉が返って来た。

私は脇で聞いていて一寸驚いたのである。

らし 来ないと恩う。 事になって、 など持って働けるものではありませんよ、食べるにも人間 同じ様な質問をされたら、『人生ここ迄落ちぶれると希望 してしまって此の父子の様に希望を持って紙クズ拾ひは出 若し私が落ちぶれて紙クズ拾いの様な底辺の仕事をする い物は食べられませんので・・・』と、 尚希望をもって頑張られるか、 その様な時、 自分を卑下

けている それだから、又、 のである。 末だに、 幾らかの利益 の有る仕事を続

もい 然るに世間には若い人で生活費をまじめに働き出さな いるものだ。そうした良人を持って苦労している婦人

持 って働いてもらいたいと願ってやまない。 そうした人に私はこの紙クズ拾 **(**) の父子の様に 希望を

ているものと思う。 人間とは特別の身体障害者でない限り働く為に生れてき

どうかとを時々思い出しているのである。 あの日の紙クズ拾いの親子に希望がかなえられたか

第二十一話

私達の移住では、後日親戚となる家族が先きに来てい 色々と知らせてくれたので助かった。

持って来たおかげで、当分藁ブトン等も買う事がなかっ を温める道具)はいらないが、綿入れの布団や毛糸のセー があるので、ストーブ(北海道ではまきや石炭などで部屋 大変であったが、運賃は無料で有った様であり、十分に を受けていたので、ブラジルへの引越しが大荷物になって ター、メリヤスのシャツやモモヒキ等は持参する事と連絡 先ずは、常夏の国とは聞いて来たが、冬には相当寒い

ラジル人達も、 然し一般の先輩移民達は、そうではなく、又、一般のブ 土地を持って落ち着いた人は、米わらか、

重いわら布団が市販されていたので、それを買っていた。 コ ツシ ョンという草を乾燥した物をぎっしりと詰め込んだ

たものである。 ある。新らしい時や、乾した時などガサガサとよく音のし の乾いた皮を細くさいて詰め込んで布団に使っていたので いパンノ(布)で袋を作って、 一般の労働者として時々ムダンサ(引越)をする人は薄 ミーリョ (トウモロコシ)

ラジル人達も良く利用していたものである。 然し大変に便利で安く出来たので初期の移民や一 般 \mathcal{O} ブ

ず楽であったし、引越しが遠ければ中身を出して袋だけ持 えたのであるから簡単な事、 参して、着いた所で誰からでもトウモロコシの皮は只で貰 は、くる、くると丸めて細いヒモでしばるなら目方になら 便利の第一はなんといっても軽いので引越する 此の上なしであった。 嵵 な

た。 まう上、翌日一寸陽に当てればすぐに乾くので便利であっ 又、子供らが寝小便をしても、 かんたんに通り越して

になると、 小便のする者は 渡伯当時は私 こんな暖い国なのに寝小便する子がいた。 いなかったが、白分たちの子供が出来る様 の家では小さな弟妹はいなか ったの で、

迄するので困ったがと思い出す。 今こんな事を思 い出しながら、あの子は相当大きくなる

或る時お医者さんに聞いて見ると、

時間をおくので、自分で目を醒す様になるから」 入って一時間以内に一回おこしてさせると、二度目は相当 「寝小便は寝て一時間もするとするものであるから、

ないし、返っておこり出したりする始未であったが、そこ をさせようとしても、 治ってくれたのであった。 方なく無理矢理におこしてさせる様にしていたらすぐに でさせておかないと、それからすぐにしてしまうので、仕 と教えて頂いたので、ねかせて一時間程でおこして小 なかなかねむたがって、おきたがら

かその雰囲気に気をつけていて話して見るのも面白いかと 小便には困らせられたものであったとも言えないが、い 今ではその子も大学生の子を持 っているので、 お前

そうした毎晩の様に寝小便する子のいる様な時にはパ の布とんには助けられるのであった。

る。 を詰 そしてそのわら布とんに相当お世話になって後現在のエス に目方のある本当のわらふとんに変って行くのであった。 めた物や、コルションという草を乾燥して詰めた相当 マ(スポンジ)の衛生的な物に変って来た次第であ から次第に土地を買って落ち着く様になって米わら

物で打ち直しをする人も少なく、次第に古い物は捨てられ 力がなくなって打ち直しの必要があったが、所詮数の 移民 の時に持 って来た綿入れの布団は、そのうちに綿

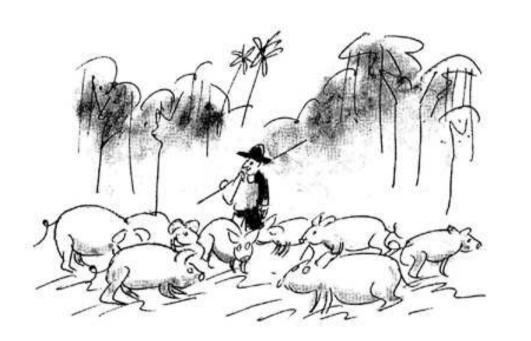
此処の物に慣らされてゆくのであった。

り、 売にならなかったであろうが、それでも『古綿打ち直し』 の商売をする人が、 然しどこかに打ちなおしをしてくれる人がいた事もあ 我が家でも送って、打ち直してもらった事がある。 どこかに居たのである。

来ないであろう。 今頃そんな話をしても、若い者には何んの事か理解が出

それは昔話でも、 既に消えうせた話である。

歩というものであろう。 い衛生的な新製品に慣らされていくのであった。それが進 所詮ふとんの古綿など焼き捨てられて、化学センイの



歩く遊牧民の事らしいが、一九三〇年代には、此のサフリ タ達が、時々、百頭、二百頭の豚を歩かせて売りに出て来 た事を思い出す。 サフリスタとは良いサフラ (収穫) を目あてに移動して

彼らは、アベニーダ、ヅッケ デ カッシー アスの元の

た。 りに 所 屠殺や加工をしていたかどうかは覚えな フォガンテ ゙ガス つって、 のデポジト のマン そこへ売って行く者が多か ゲロン (貯蔵所) (豚を離す為 0 処を東側 12 0 た 様 柵をし 0 た た場 辺 0

に何キ 中の所々に、 ーキョ 日 · を作 リョ欲しさにゾ (トウモロコシ) 口位歩くのか、沢山 ツキョ って有ったもの ツ、 ルミット(ヤシの木) キョ ロゾ の粒をもらし乍ら行くと、 ツキ である。 口とついて行くのであった。 の豚の為にはかどらず、 日 ッ 、 こ 彼らの夜営地である。 と呼びつつ、 等を割って簡単 豚はそ 時 7 ツ Н

処々に夜営地を作 である。 彼らは道の無い 私も何回かそんな施設を見かけた事があった。 って置いて何日もかけて豚を追って来る マット (森) の中に勝手に小道をあけて

自分で倒して食べて肥えてくる。 のだと言うことであった。 更に奥地に移動して、いわゆる遊牧の民 て、十分に肥えない良く歩ける内に隣近所で相当数集め 日 って、 先輩 の実の入った頃にやせ豚を放すと、豚は食べたいだけ りに来るのだそうだ。地主が入植 \mathcal{O} 勝手に山林を切り倒してミーリョを植えて、 話 では、此 のサ Ź リスタ達は その肥え工合を見 僻 地 の生活をし 7 に無断で入 くる頃に ている 77

税 ては 金もいらな いるが、思い様では極楽の生活であ 教育もい らない 唯文化と 0 · う 事 t 知れ カン 5

川に釣りに行って彼らの生活に接した一つの思い出があ 移住した年、そうした人達の住んでいる処に流れている

たのであるが、相当に時間がたっても出来てこないのであ 返事なのでお願して、私たちは表の丸太に腰をかけて待っ たので、ボツボツ帰ろうとした時には一行相当に腹が空い 「米が有るか」と、尋ねると 「有る」 という。「卵が有る ていたので、その川辺の一軒のサフリスタの家を訪て、 いてくれるかというと、「ジャジャ」(「すぐすぐ」) 持参した弁当を食べて尚何時間か釣りに夢中になってい と、聞くと 「有る」 という。それではごはんを炊 との

がするのであった。 うと思っていたら、遠くの方でトントントンとおかしな音 これ迄待ったのであるから、もうぼつぼつ出来てくるだら 「まだか」 待ち切れずに手をた、いて夫人を呼ぶと、出て来たので 何んとのろまな夫人だと思い乍ら、それでも、 と、きくと「ジャジャ」と、いう返事で仕

ではないだろうな。」 「おい、あの音はなんだろう。まさか籾をつ いて

つき上った米をペネーラ と、言い乍らも気になるので家の裏側に廻ってみると、 (ふるい) に取っているので

「ジャ、プロント」(「すぐ出来ます」)

と、言い乍ら、これからごはんをたいてくれると言うの

る から全くのんびりとした人達である。

親切者ではある。 くれると言うのであるから驚いたが、考えてみれば全くの のへった人に頼まれてから籾をついてごはんを作 つて

待って食べて行こうと、更に三、四十分待って、やっと煮 えたごはんに生卵をかけて塩味で食べて来た事が有った。 であった。 一生けんめい働らいていてくれたのであるから、もう少し サフリスタ達はこんなのんびりとした生活をしているの これから火にかけるのだがどうするかと相談 のんびりものと思っていた此の家の夫人、我々の為に して

保存すると新鮮度が長く保たれるとの事である。 上げてあった。後日聞いた事であるが、 見たのであるが、稲の穂はハサミで切って少しずつたばに して天井に保存してあった。フエジョン サーラ(客間あるいは居間)に入ってごはんを食べ乍ら 穀物は穀 (豆) も穀

のであるが、 そうすると彼らの仕事はなまくらでなく贅沢をしている 何程の収穫の有る様な畠は作っていなか

頃い 事がある。 づこに安住 の頃のサフリスタその後急激に開拓が進んだので、今 の地を求めて居るだろうか。と、 ふと思う

処にも永久に安心して居れるという事は難しい様であ ブラジルの場合は、パンタナールからアマゾン流域

にでももぐり込めばまだ五十年や百年は安住できるであら

第二十三話 造



ル)の向う側から 「オッー」 に将棋の好きな赤津氏の一寸暗い店があった。何時入っても誰い店があった。何時入っても誰に将棋の好きな赤津氏の一寸暗アベニーダ・パラナの始まり

段で売り渡たされた様であったがその後どうされたのか私 た。いつも誰かと将棋を打っているのであった。あまり繁 昌しない店であったが、随分遅く迄頑張っていて相当な値 と、応答して立ち上って来るのが店主の赤津君次氏であっ との縁はなくなった。

商としては始めての人ではなかったかと思う。一九三九年 に西電気商店があ の開業との事である。 此の赤津商店の前、今の高比良さんのパステラリヤの った。 西正造さんの店で、日本人の電気

たのか、かくれてラジヲを聞かないかと誘いを受けて、そ の仲間となり、 家に電気も無い、車も持っていない私達には縁 ったが、 戦争が仲頃になった頃、誰からの誘いで有っ 西商店と縁が出来てくるのであった。 の無い

お世話であった。その頃から、 ではないかと思ったが、そうした体格の人であったのであ ラジオも、 コムラドール(バッテリー)の充電も西氏 あのやせた細身の人で病人

持ち運びするのには難かしかった。然しこのラジオのおか 者がコムラドールを持っている事が知れると、ラジオを聞 勅語を聞き、勝ち組にだまされる事も無かった事を喜んで きてはだめだ。一寸野菜でも入っている様に軽そうに持っ いるのである。 て来いと言われるのであるが、案外重いもので、軽そうに いている事がばれると困る事になるから重そうにかつい コムラドールを充電に持っていくと、車を持っていな 戦争も途中から旗色が悪くなった事を知り、

る時の七〇馬力のトランスは西氏の製造で、これが長く働 戦争後ローランジヤに移転してファゼンダに電気を入れ であった。

専門書を購入して独学で、トランスやモータの製作を手 西氏は専門の教育は受けていないのに、主にイスパニ て信用を得ていたのであるから驚きである。

ーダ パラナの店では手狭となって後には

た。 手前 グリラーの手前に移られたのであった。此処に移られた頃 まだ働くかも知れない から息子さんが働らかれる様になったかと思う。 の後でキンチーノ ・カブールのフィン モンタ は何時迄も責任を持って面倒を見てくれる人であっ の角に移られていて、 てくれた。マキナはカフェーの生産を止めたのでデ オルマード (再生品) ・マキナを据える時、風変りな三十馬力のモトール (取りはづし) ・ボカユーバのフィン (終り) より一ク のである。 してしまったが、 私は何回か伺った事がある。 を分けて頂いたが、最後迄働 此のモトールの様に、 ワルテ (終り) モトー 口 のシャン 私がカ (区画) ールは、

に現在 ラン いでいる 此の人キンチーノに店を出されてしばらくして亡くなら 後を息子さんが継がれ、 コを下 の工場をBRを前にし建設し、親子二代を堂々と引 -って、 のは立派である。 B R に 出 る 前 此処が手狭とAV・リオ・ の処に工場を建てたが、 更

仕事に責任を持った父親正造氏の性格が永続 かも知れない の基にな

第二十四話 イッペの受難



出来る。 に、紫とそれに白い花の三種が、私共のパラナで見る事が イッペの花はブラジルの国花であるが、この花には黄色

が、国花という場合何か櫻の様に、多少濃淡が有っても櫻 楽しいと思った方が良いのかも知れない。 色という一つの色で決められると、 三種あるということは、尚別の色も有るように思わ 簡単で良いと思うが、又、何色も有るのは、賑やかで 子供に画をかかせて

それでも一般に国花として意識して、雑誌や何かに出て

には黄色イッペが割合に多い様に見受ける。

してふさわしいと思う。 かさは何んとも此方の心を楽しませてくれる。全く国花と 私もイッペの黄色は大好きである。あの明るい、あざや

花盛りは美しい。此の木は大木で一本ではあるが見に行く えてくれたが、それから此方も気をつけるようになって見 り入って三〇〇メートル程のルアの右側に有る紫イッペの ダ・アルツール・トーマスをアベニーダ・チラデンチスよ ナ市の場合、ルア・セナドール・ソウザ・ナーベスと、 価値がある。 ると黄色イッペにも紫イッペにも花の咲き方、色の濃淡や 私 の割に数多くの花を咲かせて美くしい。又、アベニー ラポーゾ・タバーレスの角の家の庭の黄色イッペは、 つやに色々と相違がある事に気が付いた。ロンドリー の友だちに苗木生産者がいて色々の種類の ある事を教

湧 てきたからである。 の木の皮を煎じて飲むとガンに利くと言うことが伝わっ ところが此の美しいイッペの木に特に紫イッペに降って いたように受難の時がきた。一九六〇年頃であったか、

患者に飲ませた処それが治ったと言う噂が新聞紙上に迄発 表されたからたまらない。 何でも北伯の一パードレ(神父)さんが、何人かのガン

こととなった。 番手近な町の街路樹が早速何者にか生皮をはぎ取られ ロンドリー ナ の場合、サン ・ペード 口墓

地 れな姿になってい の前 の並木がかわいそうに毎晩の様に誰かがは った。 いであわ

を持 あった。 遠方から迄あそこにも何本かのイッペが有ると、畠 取ってある始末で、全くイッぺの受難である。 自然に生えているイッペも春になると美しい花を咲かせて てみると、 中では心配はなかろうと思いながらも、花を頼りに行っ 私 ていても楽しませてもらっていたのに、或る日あ って行って、 のフアゼン ハシゴの替りに六〇センチ程のリッパ なんと無残にも丸裸に皮をはがれているの ダの 釘で止めながら登って高い所まではぎ レゼルバード(保存用)の森林 (板切れ) の森林 言で働ら

らな 将来もし家族に患者が出たらと先廻りした考えでルアの並 木でも、他人の土地のものでもハギ歩くのであるからたま それも家族に患者のいる場合はしかたがないとしても、

題からもほぼ完全に消えてしまった。 いたか、その内にいつとはなく下火になって今では人の 然しあれ程ブームに湧いたイッペの皮剥ぎも、数年も続

のは人間 でも仲々治せない病気となると、たわいもない事にも迷う 当時は殆んどの家で大きな束にして棚の上に置 である。 の弱さか。 『溺れる者ワラをも掴む』という事で、 いてあ 医者 0

てしまったのである。 時期は大変なブームであった。町の中の並木から、 の中の木まで皮をはがれて、かわいそうに丸裸にさ

で行くので、 枯らさない様にと一ヶ所を残して置いても次の人がはい 全くイッペの木には受難であった。

第二十五話 ポレンタ



ジャングルの中に入植したのであるが、セッテ・バーラス て、ロンドリー 渡伯翌年(一九三四)セッテ・バーラス植民地を放棄し -ナ市の郊外の中央区へ移転してきて全くの

は出来ていた でも原始林 中に入って伐採したの ので心配は無 かった。 で、此方に来ても覚悟

張 道の札幌市から先きに来ていた家族がいた。 かえ り合い良く開拓にかか って此方は永年 作物のカフェー ったのであるが、此所 の栽培が 出来る に同 じ北海 \mathcal{O}

仕事に 家族構成 対する意欲が少な は働け る男四人女二人の最高組なのであるが いのであった。

につ 時 いてはなんとも意欲がないのであった。 来てい たが、話をしていても生産という事

少し熱心にやらないかと思 元気に働けない 植えさえすれ ば良 との事であ 収穫が有る楽しい仕事を、なぜもう った。 ってみていると、胃腸が悪くて

ていて胃腸を悪くしていたのである。 後に解 ったことであるが、渡伯当時ポ レンタを主食に

た。 私たちはその当時、 ポレンタというも のを知らな カン 0

け米、 う事もなく過ごした。 な事もあ キレーフの様な事もあって、出来た御飯が、だんごのよう 従って資金不足で普通の白米は買えなかったので、く 時には少し安いと思 ったが、米の 御飯であるから、 ったら、今頃ヒヨコ それ程まづいと思 の餌に する

る。 ような時代には、 しファゼンダに配耕されて、仕事が日当にもならな タを常食とした家族も相当にあったらし 小米の御飯も食べかねて、 もっとも安い

力であ 原料はフバー(トウモロ つと曲もの り、腹持ちも良かったのであるが、 である。 コ シの粉) である。 ポレンタは 安いの は魅

のに相当に時間をかけないと完全に煮えないのである。 ポレンタはイタリヤ人の好物であるが、粉が原料であ る

と出来ないものである。 に出なくても良い人がいて、ゆっくりとかきまぜていない 従ってこれを作れる家となると婆ちやんか、誰か、

る。 それを仕事に追われている移民の女たちが作る それが長い間に胃腸を害ねたのであった。 材料が粉であるから、 どうしても煮え方が足りず、 半なまがそれ程に感じない 半なまを食べる事にな \mathcal{O}

実在 どれ程そうした人がいたかは解らないが、移民の中 した話である。 には

ンタを作って過したという家族にも会った事がある。気 く出来て何十俵かの収穫をしたが、米は売る物で食べる フ 或る家族では、幸いに、その内に余作地に植えた米が良 の苦労が余程ひどかったのであろう。 って、主人が米を食べさせずにフバーでポ \mathcal{O}

シ、 Ŕ とれた上、フエジョン 出来たので、此方らにたどり着いた移民は食料に不自由す こちら北パラナでは土地が肥えていたので荒山時 カフェー バタタ類(ジャガイモその他) の間作として植える様になっても、米が (豆類)、 ミーリョ あらゆるものが良く (トウモ . 良く 口 コ

る事は殆んどなかったのである。

滞は穀倉地帯として力強い生産を続けているのである。 れたものである事 も点在していたテーラ・ロッシャという独得な赤土地帯カンバラからマリンガにかけてを主体にして、その他に は、どれだけ肥えていたのか、誠に大きな恩恵を与えてく 砂質地が牧場に変って行く時代でも、テーラロッシャ地 いや今でも与え続けているのである。 ロッシャという独得な赤土地帯

此 の肥えている土の恩恵を忘れてはならない のである。

第二十六話 落雷



或る日の記事に、雷に感電して邦人が亡くなった記事が

出てヒヤッとさせられた。

落雷で死ぬとは耐えられない気持ちであった。病気ならあ が無いので何とも嫌な思いであった。 る程度は注意も出来、治療も出来るのに、雷ではさけよう その内に日本に帰りたいと思っているのに、或る日突然

長さで大木に落ちるとそのいため方の物凄さは、大変な力 であるから、 特 に此方の雷 人命など一たまりもな のゴロゴロなるのは北海道の雷の三倍位 V . \mathcal{O}

する。 それなのに我々は夕立ちにあうて一寸大木の陰に 危い事である。 雨宿 り

持って、 然ゴ 思った瞬間四、 「ば 立となり、 の場所へ身をかくしたのであるが、青年が一人、カンポ に登ってエンセラード(シート)をかぶる者、皆それぞれ の試合に近所のファゼンダへ出かけた時、試合の途中でタ いた顔が、見る間に元の色に戻ってきた。 に ったり」と倒れて動かない。「あっ!やられたか」と 青年を穴にねかせて、体に土をかぶせた。 いれば結構雨にぬれずにすむわと思って見ていると突 と稲妻が走り、 ロゴロゴ 木の影に身をよせたのであった。風があったので、 る時、フアゼンダのカマラーダを連れてフッテボ 雨の中を走りよって、「さあっ」と浅い穴を掘っ 小さな売店小屋に飛び込む者、カミニョン ロゴロゴロと大雷がなったと思うとピカピ 五人の友人たちが、エンシャーダ(鍬) その木に落ちたのである。青年は 風

然し助からなかった。

電気が抜けて助かる事があるが んなで涙を流 此 の人達の話では感電した場合この様に土をかぶせると したのであった。 今日は助からなか ったと皆

で見ていた私は土をかぶせると見る間に元の色にな 0

たものである。 てきた のには驚ろ いた。これでは助かる事もあろうと思 0

若しあの木の下に雨宿りしていたらと忠ったら、身ぶるい 枝も幹も細々にくだかれてばあっと吹き飛んでしまった。 程前方で七、 にしても怖ろしいのは雷の力である。ある時、百米 八米の木に落ちる のを目撃したが、 その木は

雷があって感電したが、此の時は電力が少なかったので、 気にふれて一、二メートル飛ばされ、命は助かったが、 木自体も余り痛まなかったが、それでも、地面を走った電 私 一ヶ年程本調子ではなかった。 ブラジルでは相当の数の人が落雷で命を落している。 の友人が咋年、 十メートル程離れていた銀杏の木に落

に割られている Mもある高 である。 土地を開拓している頃、途中の道べ い太いペローパの木が上から下迄、雷に真二つ のを見た事があったが、恐ろしい力がある りの二十五

が心配であった。火を燃やすと獣は寄りつかないという に預けて、ちょっと見てくると言って入ったマットの中で であるが、煙草を吸う父も兄もマッチの入った上着を友達 てこれずに、倒れていた大木の陰でねる事にしたが、猛獣 人で土地の視察に歩いてマットの中で迷い暗くなっても出 ブラジルに来た初めのセマーナ (週) に、 父と兄と三

ず、 る。 安心した。それでも恐ろしいものとして毒蛇がいた。 出があるが、後にアフリカの様な猛獣はいない事を知って めて敷いて、三人体を合せて寝る事にしたが、仲々眠られ 迷ったので、 は血清を打てば助かるので、やはり怖ろしいのは雷であ 父は心配して、小声でお経をあげていた。そんな思い いに近親者で命を落とす人のいなかった事は有難 マッチがない。しかたがないので枯れ葉を集 これ

第二十七話

て焼く前の事であったかと思う。 それは日本から来て間も無い、まだジャングルを伐採

けた時の事である。 私と兄とで十キロ 程ある川へペスカ (魚つり) に出 カン

種を貸してくれと交渉しているのである。 事がある。その時近所の外人達が二人程来てフェジ 上見(あげみ)という店が川辺りにあ って、 → 休んだ ョンの

借りて喜んで帰った後で上見氏の話では、

ると何人でも借りに来るが、昔から居る人達だから収穫 「此の辺の外人達は種物は借りたら得だと思っ て時期にな

かるのだ。」 たら戻しに来るし、それが三倍返しだから此方もそれで儲

という事であった。

りるより買って植えた方が得ではないかと思ったが、貧 いからか、 私は、三ケ月程でとれるフェジョンの種を三倍返しで借 それとも習慣になっているのかも知れない。

でも一寸事情は違っていた。 しの貸借に行き合うのであったが、その時は同じ三倍返 その翌年、私達はパラナに移って来て再び種物の三倍返

で私が聞いていた覚えである。 それは林という人が、遊びに来て父に話したのをその脇

林氏の物語りである。

『それは、入植した翌年であった。 が、その年には急激に日本人が移動して来て米を食べたの 量が艮くて米が豊作で相当の俵数を保存していた。ところ 値は異状であるが、私の米はその値で売れるので、来年値 事が出来ないので、私が次の様な提案をした。今日の米の 五・六ミルの白米が五十ミルレースにと飛び上った、と、 が急激に暴騰して来て一俵七ミルの籾が二十七ミル、 の米の値段を知ているか聞くと、「知っている」と言わ その時、三人の新移民が、種籾を借りに来たので、此の頃 で、前年度の僅かの人の収穫した米を食べ尽くして、米価 て返すつもりなのか」と、聞くと三人共返答に困って返 ので、それではあなた方に尋ねるが今日貸す種を「どう 私はその初めの年は雨

変動からの三倍返しであったが、私には前年にもあった事 り良く売れヽば、売って二十七ミル払ってくれヽば宣しい 倍にして返 で面白く聞いていたのであった。 った。 というのである。三倍返しでも、 どうかと、 った場合下った米で返してくれても困るの してくれ。若し三倍が二十七ミルの現在の値よ いう提案で三人が納得して借りて行った』 林氏の話は尚続くので 此処の場合は、 で、来年三 値段の

『そうして翌年になってそれぞれ収穫が終ると籾は れぞれ三倍にして返して来た。ところが沼田さん面白いも のですなあ、此の三人が三人とも心が違うのですよ』 ミルに迄下った。三人とも三倍返した方が得であるからそ 一俵

と話は続いた。

『一人は同じ一俵でもシイナを混ぜて軽いのです。 として取引していたのでした。次の人は同じ一俵でも良く 舎では秤りがな 余分に置 れましたので私の収穫した米を一俵食べて下さい」 倍のほかにもう一俵持って来て しっかりと重い物を持って来ましたが、此の人は三 かけてあって重いのです。もう一人の人はやはり同 いていきました。人の心とはいろいろなものです いので二十リットルの空かんで五杯を一俵 「林様のおかげで沢 当時田 山取

と、いう林様のお話であった。

影響を与えている事と思うのである。 若い時に此の話を聞いていた事が私の 人生にかなり大き

のである。 又、此の三人の子供達の運命が、 親の心に比例している

必要の様である。 借りを正しく返すという事よりも、恩には一俵のお礼が

第二十八話

酒乱

繁盛していた。 N家では二人の男の子にも恵まれ、商売も大変に順調に

あった。 主人は大変温厚な人で、まじめで近所づき合も良い方で 奥さんも亦、おとなしい立派な人であった。

言うなれば町の名家であった。

が、五〇才そこそこで風邪をこじらせたのか肺炎をおこし て、アッ気なく亡くなられてしまった。 ところが此の主人、大変体格も良く健康な人であった

と二人の子供と暮す場処は十分にあった。 して家賃生活に入った。広い屋敷であったので、 末亡人になった夫人は自分の店は止めて、その場所を賃 奥に自分

であったが、世の中は計画通りにならないものである。 そこで母子三人のしあわせな生活が設計され実現する筈

て来ると働く事をせずに酒を飲む様になり、次第にその飲 あれだけまじめな両親の元に育った長男が青年期に入っ

と、乱暴する様になってきたのである。 む量が増て行く ので母が注意をしたり、 小使いをしぶる

る母親に刃物を持って切りかかる事になった。 ているので信じられない事になったのであった。そうこう ている内に、 近所の人には両親 或る日ついに、小使をしぶり、 の人格を思い、子供の少年時代を知 注意を与え 0

う事で逮捕され刑務所に送られた。 査に来てもらって取り圧えてもらったが、尊族殺傷罪と言 とめに入る近所の人も恐ろしさの余り警察に通報 巡

けて釈放されて帰宅するのである。 酒 の気が切れると良い青年なので、暫くすると説諭 を受

となる。 然し暫くすると、 又飲み出し、 乱ぼうをするので再逮捕

病院で亡くなった。 そうした事を繰返している内に、 精神病院に送られて治療を受ける事になったが、 これは酒乱と判断さ その

同じ状態がおきて来たのである。 ところが、その頃から次男の洒が過ぎる様になって兄と

『不思議』な事と、N夫人を慰めるのであるが、次男の乱 暴も手が付けられなくなって兄と同じに精神病院に送られ る事になった。 近所の人は『気の毒』と言い、N家の様な立派な家庭に

婦 の元に此の事件であるから、考えられない事と話題にさ 世間の人には、酒の飲めない全く品行方正な N 家 \dot{O} 御夫

れた。

男の子に恵まれ、遺産を継いだので晩年は不自由の無い生 活を送っておられた。 た。その為に早く末亡人とはなられたが、二人のまじめな なって、少し体の弱い育年と結婚してもらったのであっ 夫人は貧しい家に育った人であったが、私の父が仲人と 此のN夫人に親しく話し合えるY家の末亡人がいた。Y

来を話されたのが、Y夫人から私に伝えられたのである。 このY夫人に、N夫人が、二人の酒乱の子供の出来た由

するし大変良い主人であった。世間に出ては酒は飲めな れていた。全く主人は商売は熱心、世間に対しても貢献は 人で通っていた。 その話とは、私たち夫妻は世間からは立派な夫婦と見ら

なかった。 んになる迄酔わないとできない人で、私はそれが嫌でなら 然し、 夜、夫婦関係をしたいと思ふ時は、ぐでん、

る。 院で亡くする事になったと言って泣かれたとの事である。 普通であったので、心配は取越し苦労であったかと安心し ていたのであったが、結果は二人の子供を二人共、精神病 老後を全く安楽に暮せる財産を築きながらこの不幸であ それでも生れた二人の子供は、幼年時代から少年時代は

思議と言う事はない様である。 般世間の人々はふしぎな事と思っているが、 世の中不

せられたのであった。 の事であるが、それが仏様神様 原因と結果の関係には厳然とした法則が働らい \mathcal{O} お仕事な のだ。 と痛感さ ていると

ら、夫人にも自分の苦しむ原因が別なところに有ったので なられていて、現在苦しんで居るのはN夫人な あらうと思われるのである。 るのに、その飲んだ主人は、子供の酒乱の始まる前に亡く そこで尚少し尾を引く が は、 あ \mathcal{O} 時 飲 み過ぎたと のであ れ

然し私はそんな事を知りたいとは思わ

則の中に生きている事を認識しなおしたかったのである。 唯この話を書きながら人間とは全ての事、原因結果の法

第二十九話

ゲ

が、一般は剃刀の発達で殆ど、 全般的にさっぱりとしている。 の頃でもヒドク? 髭を生やした人がボツボツは居る 毎日のように剃る人が多く

る。 考えてみるとカミソリも良く発達したもの \mathcal{O} つであ

小型の上手軽に便利なものが出来ているし、ジレッテ(安 旅行用にはどこででもそる事の出来る電池カミソ ノリ等も

思っ れる安い物が出来てきた。 かみそり)にしても、 て使っていたら、取り替えのきかない二枚刃の良く剃 刃が取り替えられる ので便利と

飛行機や車が発達して来て驚ろいたり、喜んだりし 小さなカミソリ迄次々と発達しているも

西洋カミソリが、折にたたみ式ではあるが、刃は安全カミ をそってくれるカミソリが、何時の間にか、折りたたみ ので便利になっているのであった。 ソリの刃を半分にして、これをさし込んで使う物に替って いる。これで昔式に研石にかけてとぐ必要なく良く切れる 床屋に行って気がついたのであるが、彼れらが此方の顔 $\stackrel{(}{\mathcal{O})}$

本カミソリを持って来ていた。 そこで移住当時の事を思い出すのであるが、私 \mathcal{O} 父は 日

ぶさる様になっているのに対して、刃にかぶさる柄がつい ていないのであった。 て、たたむと、 日本カミソリとは、西洋カミソリが折りたたみに 危なくない様に刃に柄がさやとな ってか

それで保存に危険なのでしまう時には 刃 \mathcal{O} 部 分を紙 カ 布

の姿を思 それで時々、切れ味が悪くなる い出すのである。 \mathcal{O} で砥石でとい で 1

石 石が、カミソリを砥ぐに良い状態になっていなかった事で これで父がかなり苦労したであらうと思う事は、その 包丁も砥げば、鎌の様な曲った物まで砥ぐので、

けんが、豚の油かす等で作るせんたく石けんであった。 で、見苦しいと思う様な事はなかったが、その時に使う石 それでも父は時々カミソリを砥ぎ、ヒゲも剃っていたの

の収穫が始る、即ち開拓四年目頃からではなかったかと恩 これがサボネッテ (化粧石けん) に更わるのはカフェ

自家製の石けんが有ったからの事ではあったが、やはり、 心の底には、経済していかなくてはという心構へが有った のかも知れない。 なにも経済が苦しかったからという事ではなく、そこに

そこで一つの思い出を書いてこの項を終りたい。

入植八年目の事であるが、同じ北海道から来た人という事 で親しくなった人の家へ妻と年始に伺った時、 私が四十一年に結婚した翌年の正月の事であったから、

「あ、良く来てくれた。」

まの有った為かも知れない いた。ずいぶん地味の悪い土地だと気づいたのは、 と挨拶を交した後で奥に引き込んで仲々出て来ないの 庭に出て見たり、近くの畠の作物の工合を見たりして 此

えてくれたのは良かったのであるが、先き程はやしていた 無精ヒゲを新年だからと、 られたのか、とにかく口の周りは気の毒にも血のにじんで は良いのであるが、カミソリが無くて台所の包丁ででも剃 暫くして先きに奥にはいった主人が出てきて機嫌良く迎 いそいでそり落としてくれたの

いる傷あとで一杯なのであった。

為に、此のキズをされたかと思うとなにか気の毒な気持ち にさせられたのであった。 誰も尋ねて来ない山奥に私が夫婦で新年の挨拶に伺った

買って十年にもなっていたのであった。 此の人は二十アルケーレス(約五十町歩) の土地 を

相当に苦労をしていたのかも知れない。 ともあれ、日に日に延びて来るヒゲの為に初期の移民は

第三十話

からロンドリーナ市に移転して来てからの事と思う。 私のパラナ新聞との出合いは一九五三年初頭ファゼンダ

る。 又、事実として私はパラナ新聞の創立は知らないのであ

思い立ったとの話である。その為か私の覚えには『みんな と大型活字で宣伝していた事を思い出すのである。 ナの宮村季光氏が、その宣伝の必要上パラナ新聞の創刊を で築こう 聞くところに依ると植民地建設に踏み切ったアプカラ 我らの植民地』とか『建設 宮村植民地』等々

が働らいてくれるので有難い た。さすがは策士家である。将を射止めると、後はその ンドリーナのシャーカラに住んでいた山下源治氏であ し白分は広告代だけ払う事に決めて、 で事業へ明る ところが土地の宣伝が主な目的で初めた新聞 口 既に日本人会長も勤めて、 -カル新聞は経費に喰われて赤字がかさんでくる い宮村氏は、これの引受人を物色し 0 弁も立ち、 先ず目を付けた 知名度も有る では あ 譲渡 0 口

るの 伸氏であった。「日本人会の山下会長のすヽめる事なら」 と承諾したのであるが、結局は大きな損害をかぶる事にな った。先ず説き落したのは人の良い事で知られる島袋常 山下氏は自分を社長として、株主の勧誘に奔走した であった。 \mathcal{O}

された事があ いに応じて新聞発行継続 次に製菓業の桑原コーイチ氏や水田隼人、久保田某と誘 何に人良 た事であらう。 並びに広告料の集金が思う様に進まず、月末が来ると に計算書は島袋氏 の島袋氏でも半年も一年も続けば腹に据え 或る日、氏を訪ねるとその不満を洩ら への賛成者は現われて来たが の所へ廻って行くのであった。

た。 の牛窪清四郎氏であった。時には息子の 野議員の手に移っていた様であった。編集は その後に片岡嘉輔氏が、編集をされていた事も有 平野氏が中心となっていた時は経営はアントニオ・ り、又、平野政雄氏が中心となっていた様な事もあ マンガで有名 譲」 の名を った様 0

使 っていた。 此 の人達の時代が一番長か ったであろう。

が入ったと喜んでおられた。然しその機械を末だに使って で一千数百字の活字を一つ宛拾って行くが案外に良い機械 てもらって来て始めたものらしいが六〇年頃か、写真植字 いるのであるから驚ろきである。 創立には五〇年頃、ブラジル時報社の古い活字を分譲

ならない能率のあがるものが出来ている今日ではないか、 と思うのであるが、 如何に堅牢とは言へ三、四十年前の機械とは比べものに どうであろうか。

うが、本人には乗りかかった舟で仕方がなかったのであろ された。 大事な時期を裁判に明け暮れしてしまったのかと残念に思 創立者の宮村季光氏は二、三年前にクリチーバ市で逝去 政府対と あれだけ有能な人が、何故三十有余年人生の \mathcal{O} 裁判には注意が必要である。

である。 注意というより、くれるだけ貰って諦めた方が得策の様



地を決定して伐採に取り掛った。 らの案内人に連れられてセッテ・バーラス植民地に来て、 で、森林の開拓はその時期がおくれると言う事で急いで土 入植地を決める自由はあったが、時期が八月に入ったの て来ていたので、サントス港にて下船するとすぐ植民地か 私たちは移住と言っても植民といって自分の土地を買っ それは渡伯して二ケ月もしない頃であった。 着伯一週問目位であっ

らくボッボ 手のひらが痛くて道具が握れないのであった。それがしば 分をすると普通に仕事が出来る様になるのであった。 二日目にさて仕事に掛らうかと道具を持ってみると、 で め は ッと働らいている内に痛みが取れて十五分か二 才 イセ (開拓用大鎌) で下草を刈るのである

ジャングルの伐採に連れて行ったのであるから一人前の労 たのでいやな処へ来たという様なものではなかった。 働者と比べものにはならないが、他人に使われるのでない から出来るだけの仕事で特別につらいという事はなく、 とに角都会育ちで学生であった私たちを突然人跡末踏 日と自分の島が出来て行くのであり家族揃って来てい

デルーバ(伐採)してもらい、家族でも一アルケールをデ 初年度は一アルケール (二・四二ha)を請負業者に バしたのである。

まちに終り、その手間返しに後日来てくれた時の事であ えで手伝って欲しいと言うので私達親子三人で行くとたち で入植した加藤氏が、木を倒すのが遅れている に家を建てる事になると張り切っていると、同船者で並 かりに立てた小屋から通っていたので、今度は自分の ヶ月以上は乾燥させなければならないので他人の土地に 九 月の半ば頃にはその仕事も終った。 火を入れるに ので手間替 地 0

かころび落ちた。 直径 兀 ○センチ位の木の上に立った加藤氏が、滑 近くにいた父が呼ぶので行って見ると、 0

どくと吹き出していた。父が持ち合せの手ぬぐいで圧えて 地面に転んでいる氏の頭のてっぺんから真っ赤な血がどく ていて私はびっくりしたが、その時父が いるが四つ折か八つ折りにたたんだその上にまで吹き出

「そこらからやわらかそうな草を三種類位捜して来い。」

た。すると先き程迄どくどくと吹き出していた血が間も無 でもんできずの上、髪の毛はそのままの上にべたりと当て く止ったのであった。 て今度は手ぬぐいをさいて頭からあごにかけて包帯をし と、いわれたので、捜して持って行くと、それを手の平

「もう何んともないので働きましょう。」 血が止って一休みすると三十二・三才の元気な加藤氏 は

の家の仕事は遅くれているわけではないのでと言って、暫 く休んでその日は帰って頂いた。 と、言われたが、父が今日は休まれた方がよろしい。 私

その時の父の言うには

覚えていて、あわてたりおどろいたりしてはいけない。そ 当てると大抵の場合血は止まるものだから知ってお れに血止めであるが、くすりを持ち合わせていない事が多 いので、まず柔かいみずみずした草を三種位混ぜてもんで 「頭の怪我は、ほかと違って血がよけいに出るものだから

けば、 言う事であった。この時も家までクスリを取りに 日本から持参した、 札幌では老舗の『一の』という

往復する十分か二十分の出血を心配して即効のある事を 屋号で、有名な秋野薬局で製造される独得の軟膏を一キ の大かんで持参して来ていたのであったが、父には家まで った。 っていた草を使っていたのであるが、全く良く効くので

もの 草の恩恵にあづかる事が有ったが、 だらうから、三種類は混ぜた方が安心と言う事であった。 る。三種類位混ぜるというのは、中に効果の無い物も有る い草の大方に血止め能力があるらしい。自然の恩恵という 血止め草と言ってどれとどれと言う事ではないが、柔か 私たちはそれからの長 であろう。 い間に畠で働らいていて何回か、 誠に良く効くの であ

なってしまったが、 今では誠に便利な、バンダイデというば ている \mathcal{O} で、 血止め草などという話は昔、 利く事は今でも同じはずである。 んそうこうが 昔の

後書き

んとか二冊目が出来そうです。 一年に二冊の刊行予定が少し遅れ気味ですが、今年はな

それぞれに当時を偲んで頂ければ幸いです。 霜の被害を受けた人はパラナ州の人だけでは無いので、

話になって「教育かるた」 らボランテイヤとして来伯しておりました谷川先生に御世 リーナ・モデル校謹製として、私の作で、楽しい絵は折か 尚 此の本と関係は無いのですが、私の関係するロンド 数組を発行致します。

におすすめして置きます。 力をつける工夫をこらしたものです。御利用下さいます様 低学年から、高学年、成人にも面白く遊ばれ、特に会話

では今後共宜敷くお願い申し上げます。



著書 沼田信一略照

出 生 大正七年 (1918) 四月十五日 北海道札幌市北二条東一丁目に生る

学 歷 札幌市第一高等小学校卒

渡 伯 昭和八年(1933)7月サントス上陸、アリゾナス丸 直接海外興業株式会社開発のセッテ・パーラス植民地マンパウロ区へ 入植、翌年5月パラナ州ロンドリーナ市郊外中央区へ移転、1942年フ レーザ区へ移転、1950年ローランジャ郡内へ移転、1953年ロンド リーナ市内に移り今日に至る。

職 業 渡伯後一貫して農業

既刊第一部 カフェーと移民 発行1996年 4月第二部 ピンガと移民 発行1996年 9月第三部 毒蛇と移民 発行1997年 3月第四部 ムダンサと移民 発行1997年10月第五部 赤土と移民 発行1998年 7月第六部 ビッショ(砂/ミ) と移民 発行1999年 6月

第七部 霜(ジェアーダ)と移民

発 行 1999年12月 初版発行

著者 沼田信一 SNINICHINUMATA

Rua Raposo Tavares,828 - Londrina Est,Paraná - Brasil - Caixa Postal 860 CEP, 86010 - 580 - Tel: (43)322-1740

印 刷 Editora Gráfica Topan-Press Ltda.

Rua Muniz de Souza, 655 - S.Pauio Tel: (011)279-5522 Fax: (011)277-3975